

# 箕輪遺跡

箕輪町公共下水道事業終末処理場建設に伴う  
箕輪遺跡の第7次緊急発掘調査報告書

1991年

箕輪町教育委員会

# 箕輪遺跡

箕輪町公共下水道事業終末処理場建設に伴う  
箕輪遺跡の第7次緊急発掘調査報告書

1991年

箕輪町教育委員会

# 序

箕輪町教育委員会

教育長 堀 口 泉

箕輪遺跡は、弥生時代から現代に至る大農耕遺跡で、箕輪町の歴史を語るに最も重要な遺跡であります。昭和26年の伊那土地改良区設立による大規模な土地改良工事が行なわれた際に、多くの遺物が出土したことがこの遺跡の発見されるきっかけとなりました。この事実にいち早く着目した郷土史家の、故小川守人氏と故小池修兵氏によって終始調査が行なわれ、その全貌が明らかにされました。これは、箕輪町の歴史解明に一つの光をもたらしたものであり、両氏の多大な努力なくしては語れないことです。また、昭和55年～57年にかけて、国道153号線箕輪バイパスの建設に伴う発掘調査が行なわれました。広大な遺跡地内においての調査範囲はわずかなものでしたが、米作りの様子が初めて発掘調査という形で発見されました。

そして今回、町の皆様の念願であります公共下水道事業が進められ、その終末処理場が本遺跡地内に建設されるのに伴って、発掘調査を実施し記録保存を行なうことになりました。調査は、3カ月余に渡って行なわれ、古代からの米作りに係わる遺構・遺物が発見され、多大な成果を納め、無事終了することができました。その内容に付きましては、本書の中で詳細に記しておりますので、多くの研究者に広く活用され、郷土の歴史解明の一助となれば幸いと存じます。

報告書刊行に当たって、この発掘調査にご指導、ご助言をいただいた諸機関並びに各個人の方々、また連日の猛暑の中、調査にご協力いただきました団員の皆様方に、心より感謝申し上げます。

## 例　　言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字三日町840番地1他に所在する箕輪遺跡の第7次発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、箕輪町教育委員会が行なったものである。調査は、平成2年7月2日から9月12日まで実施し、引き続き整理作業及び報告書の執筆作業を行なった。
3. 本書を作成するにあたって、作業分担を以下の通り行なった。

土器の復元－福沢幸一

造構図の整理・トレースー根橋とし子、宮脇陽子

遺物の実測・トレースー赤松 茂、根橋とし子、宮脇陽子

土器拓影ー井上武雄、山内志賀子

挿図作成ー赤松 茂、井上武雄、根橋とし子、樋口彦雄、宮脇陽子

写真撮影・図版作成ー赤松 茂、井上武雄、征矢 進

4. 造構図は、次の縮尺に統一した。

1:40、1:80

5. 遺物実測図は、次の縮尺に統一した。

縄文土器・須恵器・陶器拓影図ー1:3、土師器・須恵器・陶器実測図1:3、1:4、

木器実測図ー1:4、金属器実測図ー1:2、銭貨実測図ー2:3

6. 土器実測図及び土器拓影図の断面は、粘土の接合状況の観察できるもののみ断面に表示した。また、断面図のスクリーントーンによる表示は、須恵器・陶磁器を表わす。

7. 本書の執筆は、赤松 茂、宮脇陽子が行なった。

8. 本書の編集は、赤松 茂、井上武雄、柴登巳夫、根橋とし子、樋口彦雄、福沢幸一、宮脇陽子、山内志賀子が行なった。

9. 本調査及び報告書の作成に当たって、下記の機関並びに個人の方々に御指導・御協力いただいた。記して感謝申し上げる。

機関ー帝京大学山梨文化財研究所、長野県教育委員会文化課、新長野県埋蔵文化財センター、

奈良国立文化財研究所、日本アイソトープ協会、南箕輪村教育委員会

個人ー櫛原功一、工楽普通、鈴木 稔、竹内一徳、外山秀一

10. 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。広く活用されたい。

# 本文目次

題　字	團　長　堀口彦雄
序	教育長　堀口　泉
例　言	
本文目次	
挿図目次	
付図目次	
表　目　次	
図版目次	
第Ⅰ章　遺跡の立地.....	1
第1節　位　置.....	1
第2節　自然環境.....	3
第3節　歴史環境.....	3
第Ⅱ章　調査の経過.....	7
第1節　調査に至る経過.....	7
第2節　調査団の編成.....	7
第3節　調査日誌.....	9
第Ⅲ章　遺跡の状態.....	15
第1節　調査の方法と結果.....	15
第2節　層　序.....	15
第Ⅳ章　遺構と遺物.....	18
第1節　検出遺構.....	18
1. 畦畔状遺構.....	18
2. 10層水田遺構.....	18
3. 15層水田遺構.....	27
第2節　出土遺物.....	28
1. 木　器.....	28
木　杭.....	28
2. 土　器.....	36

縄文土器、・土師器、・須恵器、・陶器	36
3. 金属器	40
4. 銭貨	41
第V章 まとめ	42
付載1 木製品及び廃植土の絶対年代測定結果報告	44

## 挿 図 目 次

第1図 位置図.....	1
第2図 地形・地質区分図.....	2
第3図 周辺遺跡分布図.....	4
第4図 周辺地形と調査区設定図.....	13
第5図 グリット設定図.....	14
第6図 Bトレンチ土層断面図.....	17
第7図 畦畔状遺構実測図.....	19
第8図 サブトレンチ土層断面図.....	20
第9図 10層水田遺構実測図.....	21
第10図 10層水田遺構1号杭列実測図.....	23
第11図 10層水田遺構2号杭列実測図.....	24
第12図 15層水田遺構実測図.....	25
第13図 出土木杭実測図1.....	29
第14図 出土木杭実測図2.....	30
第15図 出土木杭実測図3.....	31
第16図 出土木杭実測図4.....	32
第17図 出土木杭実測図5.....	33
第18図 出土木杭実測図6.....	34
第19図 出土木杭実測図7.....	35
第20図 出土土器実測図・拓影図.....	37
第21図 出土金属器、錢貨実測図・拓影図.....	39

## 付 図 目 次

付図 1 遺跡地地形分析図

## 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表.....	6
第2表 出出土器総数一覧表.....	36

## 図 版 目 次

図版1 遺跡地航空写真	
図版2 遺跡地遠景（西方より）、調査地近景（南方より）	
図版3 Bトレンチ掘削状況、Bトレンチ土層断面1	
図版4 Bトレンチ土層断面2（畦畔状遺構断面状況）、畦畔状遺構	
図版5 10層水田遺構、10層水田遺構杭列（北方より）	
図版6 10層水田遺構杭列（南方より）、杭列打ち込み状況	
図版7 15層水田遺構、15層水田遺構内溝状遺構	
図版8 溝状遺構土層断面、Bトレンチ遺物出土状況	
図版9 出土木杭1、出土木杭2	
図版10 出土木杭3、出土木杭4	
図版11 出土木杭5、出土木杭6	
図版12 出土木杭7、出土木杭8、出土土師器	
図版13 出土繩文土器・須恵器、出土土師器系土器・陶器・磁器	
図版14 出土陶器1、出土陶器2	
図版15 出土金属器、出土錢貨	
図版16 出土植物遺物、調査参加者	

# 第Ⅰ章 遺跡の立地

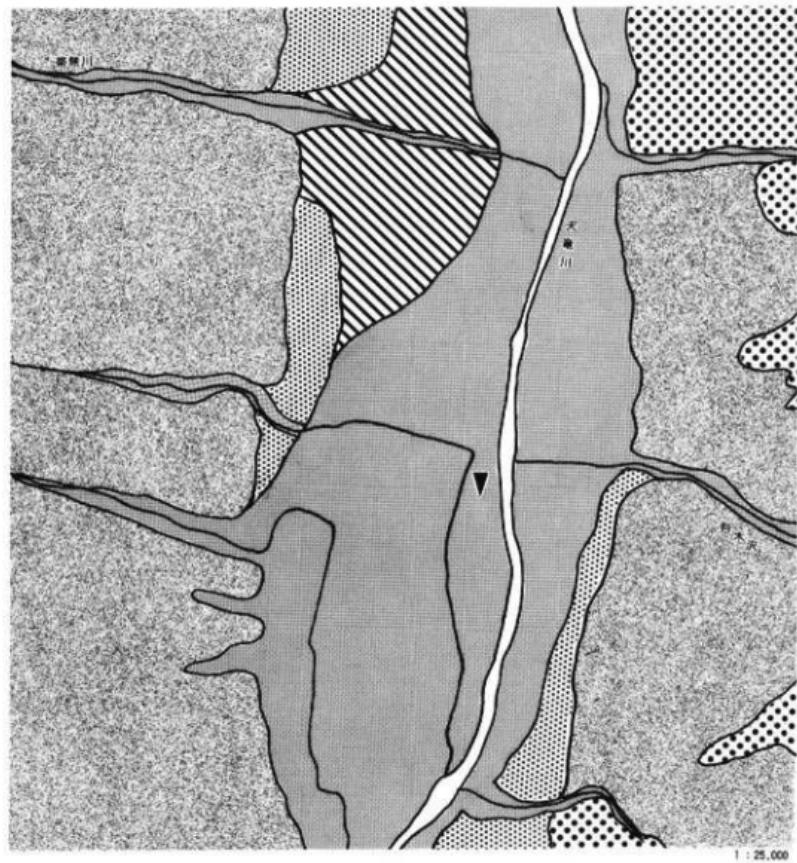
## 第1節 位 置

箕輪遺跡は、箕輪町の南部、JR飯田線木下駅の南から南箕輪村北殿駅に至る天竜川の西岸に広がる水田地帯に所在し、およそ100ヘクタールに及ぶとされる。

今回の調査地点は、長野県上伊那郡箕輪町大字三日町840番地1他、北緯 $35^{\circ}53'25''$ 、東経 $137^{\circ}59'40''$ で、標高約654mの位置である。



第1図 位置図



凡例

氾らん原（沖積層）—泥、砂、礫      扇状地の地形—砂、礫

抵位段丘—砂、礫

段丘（扇状地の堆積物）—砂、礫、ローム

山地

第2図 地形・地質区分図

## 第2節 自然環境

箕輪町は、西は木曾山脈、東は赤石山脈に囲まれた伊那盆地の北方にあり、諏訪湖を源とする天竜川が、町のほぼ中央を東西に二分するように南流している。天竜川西岸に発達した広大な扇状地は、木曾山系の山々から天竜川に流れ込む中小河川によって形成された複合扇状地である。北から、北の沢川、桑沢川、深沢川、蒂無川、大泉川、小沢川と続き、南ほど流路が長くなっている。それは、西側の山々が北から南にかけて高さを増しているためで、その流路に比例して山麓に形成される扇状地の規模も大きくなっている。扇状地における地質構造は、ローム層とその下の砂岩・粘板岩を主とする円礫層・砂の層で構成されている。天竜川はその末堆部を南流し、流路に沿って河岸段丘を作り上げている。段丘の突端部は、天竜川や中小河川の氾濫による水害を受けにくい東側に面する緩やかな傾斜地である。段丘下には、扇頂部や扇央部より浸透した地下水が伏流水となって天竜礫層と沖積層の境に湧き出る湧水が多く、扇状地を流れる小河川の水利と合わせ、豊かな水源に恵まれている。

段丘崖下には、天竜川の氾濫原がみられ、北から南に向かってその幅が広がっていく。遺跡は、JR飯田線木下駅の南側から南箕輪村北殿駅にかけて、川の西岸に広がる氾濫原内に存在する。ここは、およそ100ヘクタールに及ぶ面積の低地で、木下の北を東流する蒂無川がある時期に激しく活動して天竜川を東側に押したために、段丘崖と天竜川の間にこのような低地が形成されたのであろう。昭和27年頃から実施された土地改良事業以前には、段丘崖下や扇端部を中心いたるところに湧水や沼地が多く存在し、一帯が水湿性の非常に強い低湿地帯であったことがうかがえる。縄文時代の末期から弥生時代中期の初め頃に東海地方から伝わったと考えられる米作りは、良質な土壤と低湿性からいち早く定着したのだろう。

次に遺跡内の地形の起伏状況を概観してみると、過去に天竜川が決壊したと思われる場所から、古川と呼ばれていた旧河道が確認できよう。そして、旧河道の西側に平行して自然堤防と考えられる帶状の微高地が存在する。また、その西側に広がる比較的安定した低地が後背湿地であると予想される。

## 第3節 歴史環境

箕輪町は、天竜川を挟んで典型的な河岸段丘と扇状地で形成された地形で湧き水にも恵まれ、先史より人が居住し易い格好な所といえる。町内には、そんな原始・古代人たちが残した足跡ともいいく多くの遺跡が存在し、現在のところ包蔵地176ヶ所、古墳24基が確認され、上伊那郡内においても屈指の遺跡地帯として知られている。その多くが、河岸段丘上及び扇状地に立地しているのに対し、箕輪遺跡は天竜川の氾濫原に所在している。



- |         |          |         |         |           |
|---------|----------|---------|---------|-----------|
| ● 天 輪   | ● A 田中城跡 | ● 藤 山   | ● 上 の 林 | ● 北 城     |
| ● 南 城   | ● 猿 桑    | ● 向 壇 内 | ● 山 の 神 | ● 天 伯     |
| ● 内 城   | ● 上 人 塚  | ● 壇 内   | ● 御 射 山 | ● 達 心 寺 下 |
| ● 北 壇 内 | ● 黒 津 原  | ● 矢 田   | ● 上 金   | ● 大 原     |

第3図 周辺遺跡分布図

本遺跡が世間に注目されるようになったのは、昭和27年から三ヶ年に渡って行なわれた土地改良事業によって多量の遺物が出土したことによるものである。惜しくも土地改良事業中といふこともあり、発掘調査の実施までには至らなかったが、その状況は箕輪史研究会によって克明に記録され、多くの出土遺物は地元郷土史家の小池修兵・小川守人両氏（故人）によって収集保存されている。今日、本遺跡の存在は岡氏の多大な努力なくしては語れないところである。遺跡は、箕輪町から南箕輪村にまたがり総面積が100ヘクタール以上と考えられ、大清水・小清水・苦谷・馬場・御室田・鍛冶屋垣外・城安寺・穴田・渋田・曾根田・久保下等の多くの小字によって区分される。出土遺物は、縄文中・後・晚期土器をはじめ、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中・近世陶磁器まで時代の幅がみられる。また、田舟、田下駄、木製鋤、鋤などの農機具の他、矢板や數万本に達すると思われる木杭が出土しており、水田耕作を裏付けるものと言えよう。更に注目されるのは、大清水地籍から出土した木製人形、馬形、木牛や、御室田地籍より多量に出土した高坏を中心とする弥生土器、土師器などで、水田經營に關係するであろう祭祀的遺構の存在が明らかに予測される。しかし、これらはあくまでも土地改良工事中に出土した遺物であり、どの遺物がどんな状態でかつ、層位的な出土が確認できたかは全く不明であり、大きな発見は更に新しい疑問と課題を残すこととなった。それから約30年後の昭和55～57年に渡って、国道153号線の箕輪バイパス工事に伴う発掘調査が実施された。特に昭和57年における第Ⅲ次調査では、水田跡とそれに伴う道路を確認することができた。水田は方形に形造られ、木杭を打ち込んで畦畔を形成しており水の出入口と思われる施設の存在も確認された。しかし、時期を決定する遺物の出土はみられなかった。また、昭和58年には、南箕輪村との境にある田中城址の発掘調査を行なったが、構築規模を推定できるような遺構の存在は確認されなかった。

次に、本遺跡の周辺遺跡についてであるが、西方にみられる段丘上に連なる遺跡群と天竜川東岸にみられる段丘上ないし扇状地上にみられる遺跡群に分けられよう。ここでは、本年まで行なわれた発掘例を中心にこれらを概観してみたい。まず前者についてであるが、北より上の林（3）、北城（4）、南城（5）、猿楽（6）、天伯（9）と続く各遺跡で発掘調査が行なわれ、縄文、弥生、平安の各時代の集落址の一端を探ることができた。特に、北城遺跡からは、17軒に及ぶ弥生時代後期の住居址群を確認し、南東に広がる水田經營が行なわれた箕輪遺跡との関連性が大いにうかがうことができる。しかし、古墳時代になると町内にも多くの古墳が築かれるものの、人の居住した痕跡はあまりみられなくなり、特に段丘上には全くといっていいほどその姿はない。箕輪遺跡からは、本時代に属する遺物の出土もみられるのだから、恐らく段丘下の微高地などへの人の移動があったものと予測される。そして平安時代になると、また段丘上への居住が再開されるようになり、当時の社会構造の変化や人口増加などのなんらかの影響があったのであろう。次に後者についてであるが、北より澄心寺下（14）、御射山（13）、上金

(18)、大原(19)の各遺跡で発掘調査が行なわれ、縄文時代早・前・中期の遺構・遺物の出土が中心であり、弥生・古墳・平安と継続して集落が営まれている。特に、澄心寺下遺跡からは、古墳時代中期の祭祀的な遺物を伴う住居址が検出され、また既出ではあるが北垣外遺跡からも当時代後期の遺物がみられる。

以上、本遺跡とそれを取り巻く遺跡について概観してきたが、生産地と集落という関係があくまでも解明できた訳ではない。しかし、両者の関連性を常に考慮した上で箕輪町の歴史をみつめていく必要がある。

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	地籍	立地	時代						備考
				旧石	縄文	弥生	古墳	平安	中近	
1	箕輪	三日町・木下	平地		○	○		○	○	昭和55・56・57年に調査
1-A	田中城跡	三日町	平地						○	昭和58年に発掘調査
2	藤山	松島	段丘	○						
3	上の林	木下	段丘	○	○		○			昭和55・57年に発掘調査
4	北城	木下	段丘		○		○	○	○	昭和52年に発掘調査
5	南城	木下	段丘	○			○	○	○	昭和51年に発掘調査
6	猿楽	木下	段丘		○				○	昭和49年に発掘調査
7	向垣外	塩ノ井	段丘	○	○	○	○			
8	山の神	塩ノ井	段丘	○	○					
9	天伯	塩ノ井	段丘	○	○		○			昭和42年に発掘調査
10	内城	北殿	段丘	○		○				
11	上人塚	塩ノ井	段丘	○			○			
12	垣外	塩ノ井	段丘	○						
13	御射山	三日町	扇央	○			○			昭和54・55年に発掘調査
14	澄心寺下	福与	扇頂	○			○			昭和55年に発掘調査
15	黒津原	福与	段丘	○						
16	北垣外	福与	扇央	○	○		○			
17	上金	福与	扇央	○			○			昭和61年に発掘調査
18	大原	福与	扇央	○			○			昭和51～53年に発掘調査
19	矢田尻	福与	扇央	○						

## 第Ⅱ章 発掘調査の経過

### 第1節 調査に至る経過

近年、人口増加と日常生活の多様化で都市型の生活へと移りゆくのに伴い、各家庭より出る生活雑排水が環境汚染の要因となり、大きな社会問題となっている。町はこれに対応するため、生活環境の改善と天竜川をはじめ町内を流れる河川及び水路等の水質浄化と汚濁防止を目的とした「箕輪町公共下水道事業」を平成17年度を目標に平成元年より進められてきた。特に、終末処理場の位置については、計画区域最南端の天竜川隣接地が最適であり、天竜川西岸の水田地帯である字三日町城安寺地籍に約2.6ヘクタールが用地として選定されるに至った。

町教育委員会はこれを受けて、町下水道課ならびに長野県教育委員会と遺跡の保護協議を行ない、認可計画に依る平成7年度供用開始予定区域の約1.1ヘクタールを対象として、試掘及びプラントオパール分析等による遺跡確認調査を本年度の4月当初より行なってきた。調査では、現水田耕土の下がすぐ砂礫層となる箇所が多かったものの、旧河道（古川）と一致する区域の中央部をほぼ南北に帶状に走る粘土・シルト・砂礫などの低湿地的堆積層が確認された。また、上部の黒褐色粘土層からは、過去に土地改良工事や発掘調査などで発見されたものとほぼ同様で、水田耕作を裏付ける杭列の出土がみられた。そして、再度三者間での保護協議となり、地下構造等に直接影響を及ぼす約900m<sup>2</sup>の緊急発掘調査を本年度行なうこととなった。

調査は、帝京大学山梨文化財研究所に依頼したプラントオパールの分析結果による水田遺構の有無を確認・検討を行なった後、新たに調査団を編成して、7月2日から9月12日までを調査期間とし、調査を実施する運びとなった。

### 第2節 調査団の編成

#### 調査団

顧問 丸山 敏一郎 長野県立赤穂高校定時制教頭  
団長 堀口 彰雄  
担当者 柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館主任学芸員  
調査主任 赤松 茂 箕輪町郷土博物館学芸員  
調査員 福沢 幸一 長野県考古学会員  
調査員 根橋とし子 箕輪町郷土博物館臨時職員  
調査員 宮脇 陽子 箕輪町郷土博物館臨時職員

調査団員

井上武雄、遠藤 茂、岡 正、岡 章、春日義人、唐沢光国、小池久人、小島久雄、  
佐川正秋、白鳥博臣、清水すみ子、戸田隆志、中坪侃一郎、中坪袈裟男、野村金吉、  
伯耆原正、堀五百治、松田幸雄、松田貢一、水田重雄

事務局

堀口 泉 箕輪町教育委員会教育長  
上島富作夫 箕輪町教育委員会社会教育課課長  
市川 健二 箕輪町教育委員会社会教育課係長  
柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館主任学芸員  
石川 寛 箕輪町郷土博物館学芸員  
赤松 茂 箕輪町郷土博物館学芸員  
酒井 峰子 箕輪町郷土博物館臨時職員  
根橋とし子 箕輪町郷土博物館臨時職員  
宮脇 陽子 箕輪町郷土博物館臨時職員

### 第3節 調査日誌

7月2日(月) 晴

テントを設営し、発掘用機材を搬入した。その後調査地の草刈をした。

7月3日(火) 雨

降雨のため作業は中止だったが重機でトレーニチを掘削し、調査区の表土はぎが行なわれた。

7月4日(水) 雨

重機による表土はぎを終日行う。縄文土器や陶器片や木杭など遺物も出土した。

7月5日(木) 晴れ

重機による作業と並行して一部手作業による遺構上面確認が行われる。また、トレーニチの北側の壁けずりも行う。

7月6日(金) 曇

トレーニチの壁けずりと分層を行う。調査区やや東よりに木杭列が検出された。また、煙管の吸い口なども出土した。重機も半日動く。

7月7日(土) 晴

遺構上面確認とトレーニチの分層の続きを行う。古銭が2枚出土した。

7月9日(月) 晴

遺構上面確認を行う。3班は標高移動を行い調査区付近にベンチマークを落とした。

7月10日(火) 晴

トレーニチの土層断面測量を2組で行う。また、遺構上面確認も並行して行われた。

7月11日(水) 晴

終日、遺構上面確認とトレーニチの土層断面測量が行われた。

7月12日(木) 曇

終日、遺構上面確認とトレーニチの土層断面測量が行われた。また、現地学習会を行った。

7月16日(月) 晴

午前中は降雨のため作業は午後から行った。

終日、遺構上面確認とトレーニチの土層断面測量が行われた。

7月17日(火) 曇

トレーニチの土層注記を行う。層の数が多いた



め全部の層を対応させるのに苦労した。

7月18日(火) 晴

薄く表土をはがし6層面を出す。木杭と畦が確認されたので、平面測量を行った。また、調査地に沿って基準となるグリットを5mごとに打った。



7月19日(水) 晴

6層全体写真を撮る。木杭の打ち込み状況と、6層下の調査を検討するためサブトレを開いた。

7月20日(木) 晴

サブトレを基準にして6層下の調査を行う。そこから古墳時代と思われる甕の底部が出土した。

7月21日(金) 晴

奈良国立文化財研究所よりの工楽先生がお見えになり現地を視察した。東側の10層には小穴群が確認された。

7月23日(日) 晴

サブトレの壁けずりと分層を行う。1、2班は10層面の検出作業を行う。

7月24日(月) 晴

東側に検出されれた小穴群と同一の、10層面の最終段階の表土はぎを行う。

7月25日(火) 曇

サブトレの土層断面測量を行う。10層面からは木杭も出土した。また、畦畔状造構内より古鏡が7枚重なって出土した。

7月26日(水) 晴

サブトレの土層をトレーニングの土層と対応しながら注記した。畦畔状造構の除去作業を行い10層面を出し、また小穴群の穴の掘りを行い全体写真を撮った。

7月27日(木) 晴

10層面の平面測量を行うため、1m四方のメッシュをくる。作業も測量班のみで行った。

7月30日(日) 晴

終日、平面測量の準備を行う。

7月31日(月) 晴

二人1組で小穴群と木杭列の平面測量を開始した。

8月1日(火) 晴

昨日に引き続き平面測量を行う。午後からは重機による堆土の移動も開始された。



8月2日(木) 晴

平面測量が終了し木杭の取り上げを行う。今日から実習生が参加した。終日重機が動く。

8月6日(月) 晴

重機で15層面のやや上までの土を取り除き全員で上面確認を行った。

8月7日(火) 晴

昨日に引き続いての上面確認を行う。また、川の流れた跡らしい砂の層が15層中に一定の幅で、東西方向に見られた。



8月8日(水) 晴

15層の上面確認を行う。連日の猛暑のため地表が乾燥し水を掛けながらの作業が続く。

8月9日(木) 曇

15層の上面確認を行う。一部判断に困難を要したが全面の確認を終了した。

8月17日(金) 曇後雨

15層を明確にするため、もう一度全員で上面確認を行なった。

8月18日(土) 晴

15層中にある溝状遺構の掘削りを行なう。ベルトを3ヶ所残し掘り下げる。北側の底面に近いところから土器片が多く出土した。

8月20日(月) 晴

15層に伴う溝状遺構のベルトの土層断面の測量を行なう。多いところでは3分層することができた。午後ベルトをはずす作業にとりかかった。

8月23日(木) 曇

全体写真を撮るために15層の溝状遺構を中心として、もう一度表面を薄くけずった。

8月24日(金) 晴

15層に伴う溝状遺構の平面測量を2組で行なう。また、西側に一部検出していた遺構の平面測量も行なった。最後に、16層全体のエレベーションを測量した。

8月30日(木) 晴

トレンチの土層断面を転写し、保存することになり、その下準備として、トレンチの壁をきれいにけずった。東側から、土器片の焼が出土したため、測量を開始した。



8月31日(金) 晴

トレーナーの壁けずりの続きと、一部、機材の撤収作業を行なった。

9月1日(土) 晴

トレーナーの壁から出土した土師器の平面測量を行ない半日で終了した。

9月5日(木) 晴

土師器の測量終了後、取り上げを行った。



9月6日(金) 晴

山梨文化財研究所の先生方の説明を聞きながらの作業を全員で行なった。大きく分けて4段階になる作業工程で行なわれたが、どの作業も大変だった。みのわ新聞・伊那毎日新聞・農協有線放送が取材に来た。

9月7日(土) 曇後雨

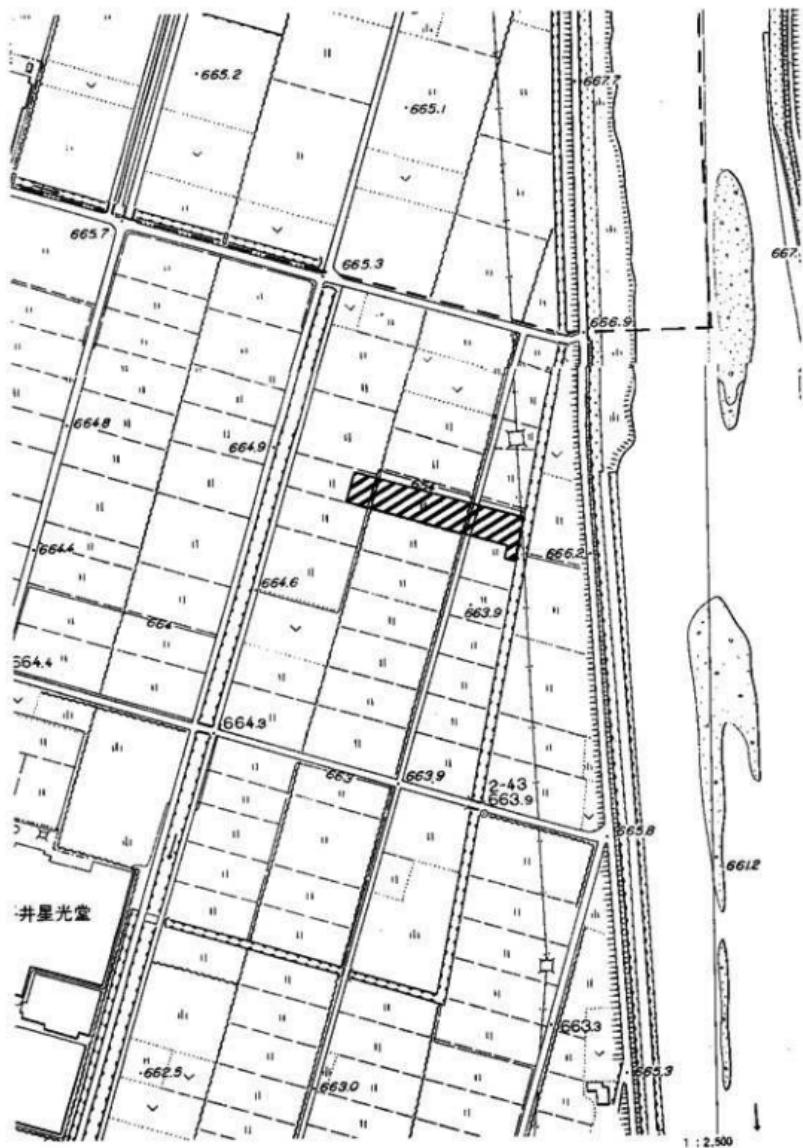
昨日に引き続き土層断面をはぎ取る作業を行なう。乾燥したところからはがして行ったが、トレーナーが長いため重量がかなりあり、人力で持ち上げるのがやっとのことだった。みのわ新聞が取材に来た。

9月11日(木) 晴

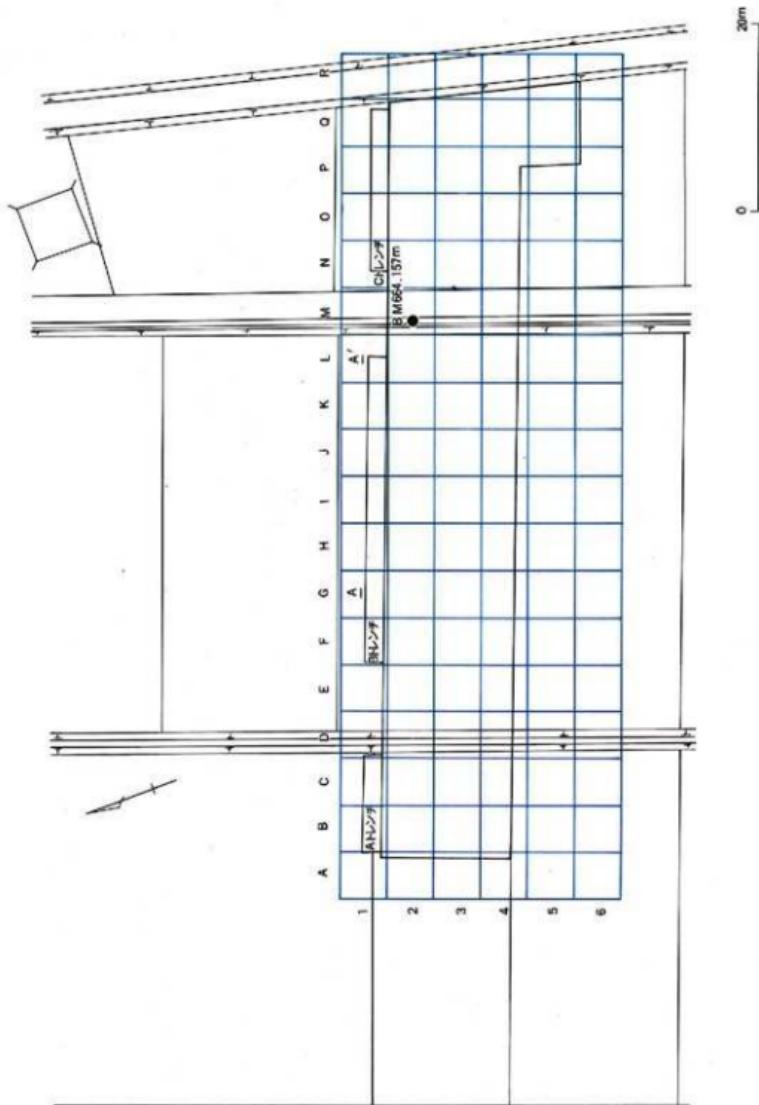
全体測量及び地形測量を行なう。

9月12日(金) 晴

重機による埋め戻し作業を行い、全ての調査を終了した。



第4図 調査区設定図



第5図 グリット設定図

## 第Ⅲ章 遺跡の状態

### 第1節 調査の方法と結果概要

調査に先立ちまず調査区の範囲に併せて、5m四方のグリッドを設定した。グリッドは、南北方向にローマ数字を、東西方向にアルファベットを用いて標記した。ベンチマークは、調査区の南方約150mにある水準点より標高移動を行ない、調査区内にベンチマーク(664.157m)を落とした。そして、確認調査による土層堆積状況を更に確認するためもあって、調査区の北側に現在区画されている水田に添って西からA・B・Cの三本のトレントを、大型重機を使って掘削した。A・Cトレントは、15~20cmの水田耕土(1層)下がすぐ砂礫層であり、遺構は存在しないと判断した。これは、土地改良工事における地盤の削平が、その原因であると考えられる。Bトレントは、トレントのほぼ中央部に長さ約19.0m、深さ約1.8mにわたって、粘土・シルト・砂礫などの堆積が確認され、特に耕土下の暗茶褐色土(10層)からは木杭の出土もみられた。これは、確認調査結果における土層堆積状況とほぼ一致するものであり、古地形のみる、南北を帶状に走る天竜川の旧河道城と考えられる低地部分に相当することがわかる。

調査は、この結果を踏まえて、この堆積層の見られるBトレントの南側に調査の重点を置き、まず大型重機による耕土の除去作業を行ない、ほぼ平行してBトレントの土層堆積状況の確認作業を行なった。また、水田土壤の存在は、プラントオパール分析結果によって何層か確認できたが、調査が容易に行えると判断した10・15層に限定して、手掘りによる遺構の検出に努め、測量・写真などの記録を行ない、遺物の取上げを行なった。そして調査終了後、土層転写を行い、土層サンプルと木製品の一部を日本アイソトープ協会に依頼し年代測定を行なった。

検出遺構は、水田遺構が10・15層の2面と、10層直上に畦畔状遺構が確認された。10層水田遺構には、杭列が確認され、また15層水田遺構には、2本の溝状遺構が伴っていた。

尚、10層の検出時における上層(3層)の除去作業中に、陶磁器を中心とする現代遺物の出土が認められた。また、これらを伴う暗渠施設も本層より検出された。昭和27年より三ヶ年に渡って行なわれた土地改良工事の際、低地であるこの一帯に土砂を搬入し、高低差を解消したのではないかと考えられ、併せて水抜きを目的とした暗渠施設を設けたのであろう。

### 第2節 遺跡の層序

今回の調査における土層堆積状況は、確認調査における堆積状況と基本的には一致している。しかし、深度の違いや地下水位の違いによって土質及び色調に変化がみられた。土層観察は、

土壤学的見地に基づいて行なったが、色調等は主観によるところであって客観的ではない。

1層－暗茶褐色土層。現在の水田耕土で、20～40cmの厚さを測り、粘性はややあるが締りは部分的にはあるものの統一性が無い。下部には疊を多く含んでいる。

2層－砂疊層。天竜川の押し出しによる堆積層と思われる。

3層－暗茶褐色シルト層。5～10cmの厚さを測る。粘性はややあり、締りはある。細砂を含み陶磁器の他、ワイヤーロープなどの現代遺物も含まれ、土地改良工事における置土と思われる。また、暗渠施設の覆土でもある。

4層－黄褐色細砂層。シルトを多く含み、部分的にはあるが20～25cmの厚さを測る。粘性は無いが締りは強い。

5層－疊層。部分的に10～20cmの厚さを測る。

6層－明茶褐色粗砂層。シルト・粘土を多く含み、5～20cmの厚さを測る。粘性ややあり、締りは強い。炭化物をまばらに含み、植物根跡に入り込んだ酸化鉄を多く含む。また、陶磁器や古錢、煙管などの近世遺物を中心に出土がみられる。

7層－暗灰色細砂層。シルトを含み、5～10cmの厚さを測る。粘性はややあり、締りは強い。

8層－砂疊層。天竜川の押し出しによる堆積層と思われ、西に向かって厚みを増していく。

9層－茶褐色シルト層。粘土・粗砂を含む。粘性はややあり、締りは強い。畦畔状遺構である。

10層－暗茶褐色粘土層。シルトを多く含み、粗砂も含む。10～30cmの厚さを測る。粘性・締りは共に強い。植物根を含み、木杭の頭は本層の上面で最も多く出土する。

11層－青灰色細砂層。シルトが多く含まれ、5～10cmの厚さを測る。粘性はあまりなく、締りは強い。植物根跡を含む。

12層－青灰色シルト層。粘土と粗砂を多く含み、5～10cmの厚さである。粘性は強いが締りは弱い。植物根跡を含む。

13層－砂疊層。15層に伴う溝状遺構の堆積層である。

14層－砂疊層。15層に伴う溝状遺構の堆積層である。分層可能。土師器の出土がみられる。

15層－黒褐色粘土層。部分的にシルトを含む。5～20cmの厚さを測り、粘性・締りは共に強い。

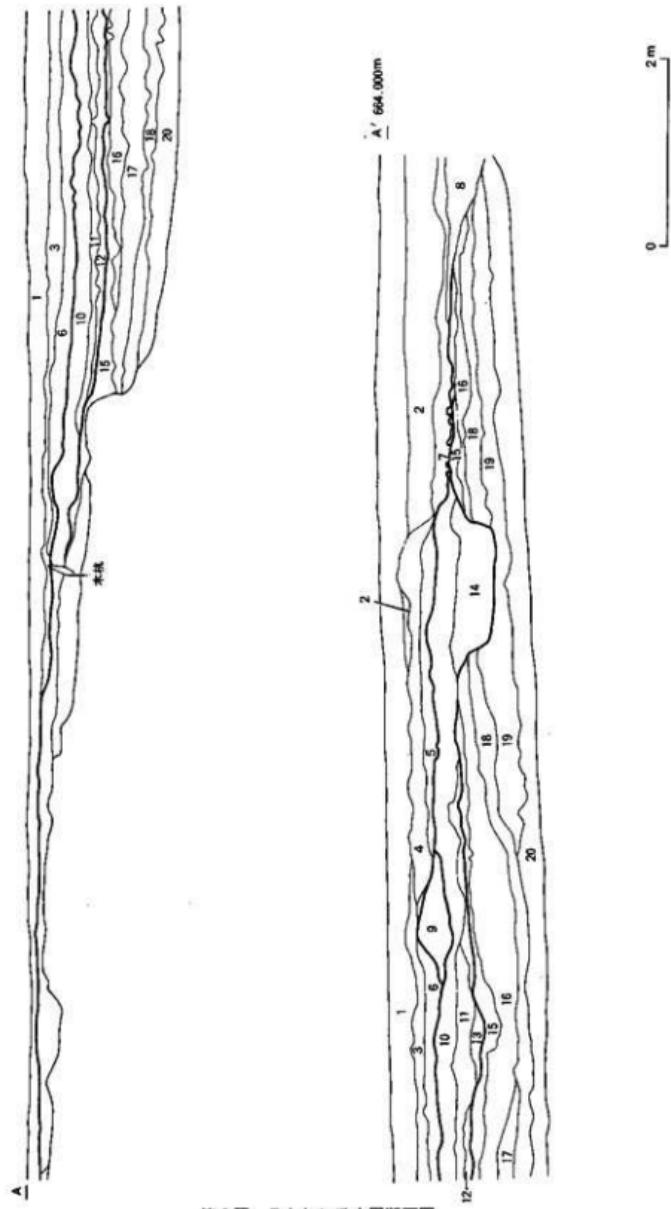
16層－青灰色シルト層。部分的に粘土を含む箇所がある。5～50cmの厚さでばらつきがみられる。粘性はややあり、締りは強い。

17層－青灰色粗砂層。シルトをまばらに含み、5～20cmの厚さを測る。粘性・締りは共にない。

18層－暗茶褐色粘土層。部分的にシルトや粗砂が混じる箇所がある。5～15cmの厚さを測り、粘性は強いが締りはやや弱い。植物根を含む。

19層－青灰色粗砂層。粘性はなく、締りは強い。20～50cmの厚さを測る。

20層－暗茶褐色粘土層。部分的に粗砂を含み、20～30cmの厚さを測る。粘性・締りは共に強い。圧縮された木質を多く含む。



第6図 Bトレンチ土層断面図

## 第IV章 遺構と遺物

### 第1節 検出遺構

#### 1. 畦畔状遺構（第7図）

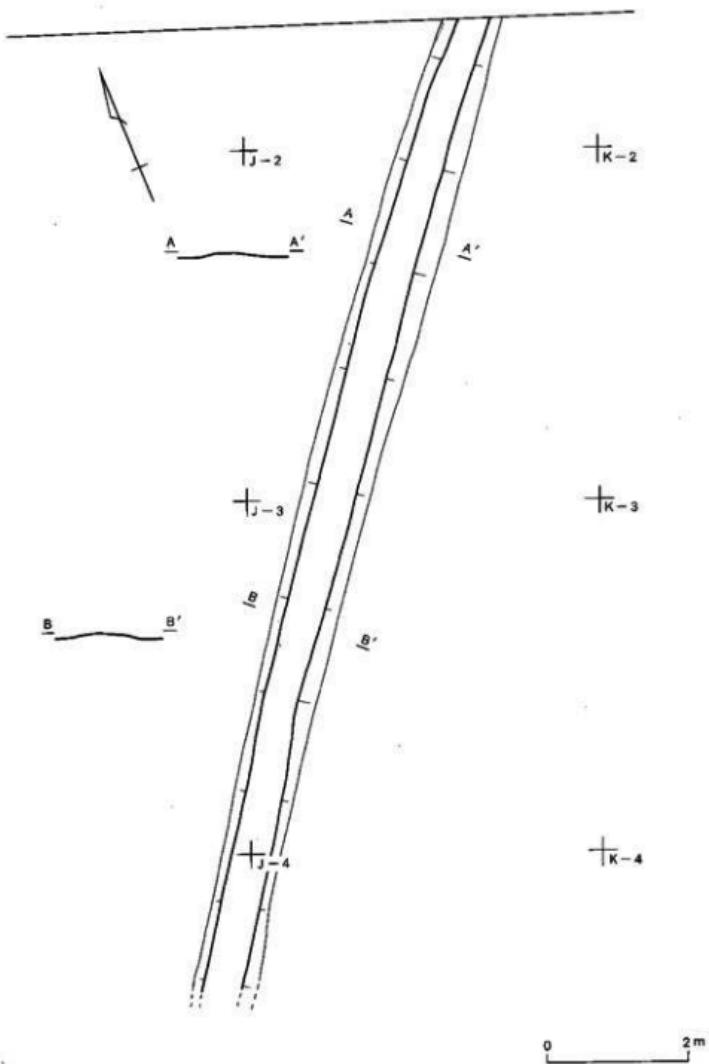
調査区のI-3・4、J-1~4グリットに位置する。層序でみると9層がこれに当たり、10層直上に存在する独立層である。方向は、N-38°-Eを示し、亞まず直線的に走っている。幅はほぼ一定で80~100cmを測る。10層上面からの高さは、4~8cmと低い盛り上がりではあるが、不注意にも重機による耕土の除去中に若干上部を削り取ってしまったのであって、トレーナーに見る土層断面では、20cm余りの高さを示している。地形的には、北から南へと緩やかに傾斜しているが、調査区が狭い範囲ということもあって、本遺跡の傾斜状況はほとんど確認出来なかった。高まりの断面形状は、上記のような経過もあり、現状では低いカマボコ形を呈してはいるものの、土層断面では頂部がほぼ丸く山形の形状である。また、杭などによる補強はされていない。

本遺構は、上記の内容からみて、10層の土を盛り上げたものではなく、人為的に土を搬入して構築されたものであることは、疑いの余地がない。これが、後述する10層水田遺構に伴う畦畔とするならば、本層に伴う杭列と二種の畦畔が存在することになる。むしろ本遺構は、これを境に、東側に堆積する砂礫を中心とする4・5層が、天竜川の氾濫による堆積層と考えられるため、これから西側への土砂の流入を防ぐための施設という見方も出来よう。また、これが調査区の南北に延びることは予測されるが、これだけの検出状況では安易に結論付けられるものではない。

遺物は、本遺構の土中より鋸び付いた状態の7枚の銭貨が重なって出土している。これらはすべて寛永通宝であるが、鋸の進行が著しく、うち4枚だけ文字の読み取りが出来た（第12図13~16）。遺物はこれのみで、本遺構の時期の確定はできないが、近世を遡ることはないだろう。

#### 2. 10層水田遺構（第8~11図）

10層は、比較的安定した堆積土で、シルトを多く含む粘土層であり水田耕土と考える。主に、6層下部より検出された杭列の頭が、本層直上で最も列状をなして露出したため、本層に伴うものと判断し、水田遺構とする根拠とした。本層の検出においては、畦畔状遺構より東側に堆積していた砂礫層（4・5層）が、本層を被覆していたことによって比較的安易に検出することができた。しかし、それより西側については、6層との境界の差が明確に現われなかつたため、東側検出面のレベルに併せて検出に努めた。砂礫によって被覆された箇所は、ほとんど傾

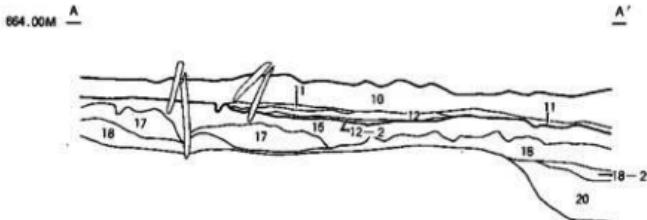


第7図 畦状构造構造圖

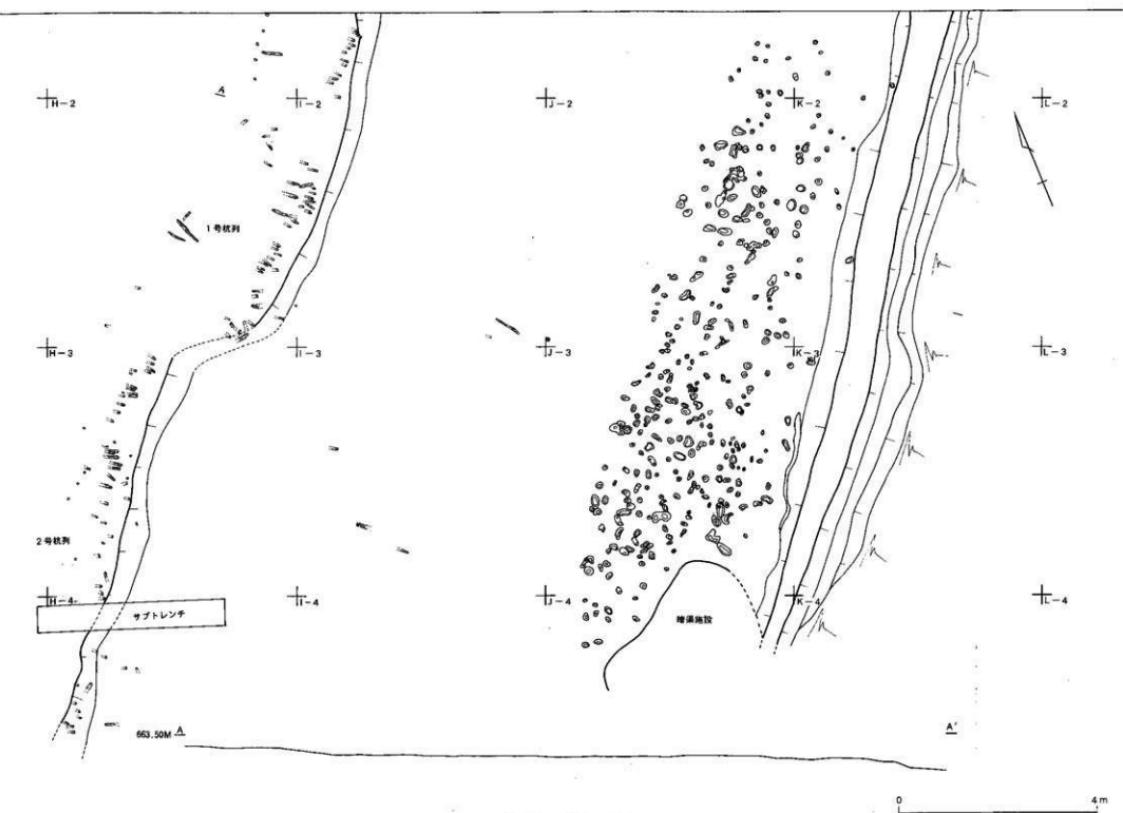
斜ではなく平坦ではあるが、直径5~15cm余の円形を中心とする凹みが不規則に確認された。これは、天竜川の氾濫によって埋没した後に、復旧等がなされなかつたために、この箇所のみが埋没当時の状況を現わすものと思われる。またその東側には、凹みのほとんどみられない帯状の高まりが確認された。これをもって本遺構の限界となり、これより天竜川の河道域となる。方位は、N-35°-Eで、高まりは確認できるところで5cm余であり、ほとんど水平に近いものであった。

杭列は、H-1・3、J-1・2グリットにみられる一群と、H-3・4グリットにみられる一群とに分けられ、前者を1号杭列、後者を2号杭列と呼称することにした。両者の方向は、N-38°-EとN-35°-Eでほぼ同一方向を示し、一体のものといえようが、両者間に空白部を有すると同時に、鍵型に列を屈曲させてずらしている。そして、杭列の方向に添って、水田と考えられる平坦な面に対して5~10cm高い段を形成しているが、杭はその段の縁ないし近接する位置に集中して打ち込まれている。特に杭の打ち込み状況を観察すると、ほとんどの杭が杭列に直行するN-128°-E方向より垂直でなく斜めに打ち込んでいる(第8図)。過去における杭列の検出例では、地面に対し垂直に打ち込むものが一般的であったが、今回の検出状況は明らかに同一方向から意識的に斜めに打ち込まれたものといえよう。これは、軟弱な地盤に対して段を形成し、それを強固にするためのものと考えられるが、南北に連なる湿地帯のほぼ線に当たる位置に一致することから、地形的な作用による特異な例であるとしかいえない。

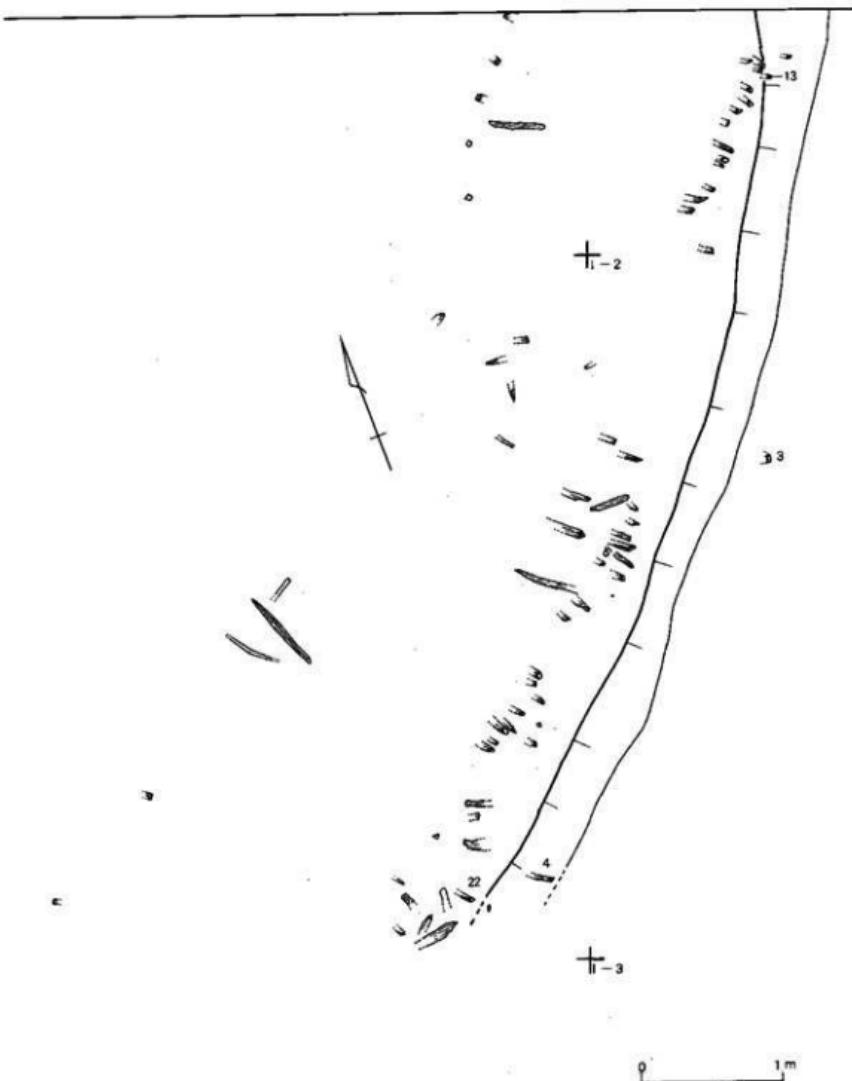
これらの状況から考えて、杭列を伴う段部は本水田遺構の畦畔的な施設として捕らえるのが妥当であるが、1号杭列と2号杭列のそれが水田区画や水利などと、どのような関連があったかは不明である。いずれにせよ、杭列から東側の本層限界域までが、耕作域として想定できよう。また、出土数は微量であったが、土師器片と併せて、14~15世紀及び15~16世紀に比定される瀬戸・美濃産の陶器片が出土している。



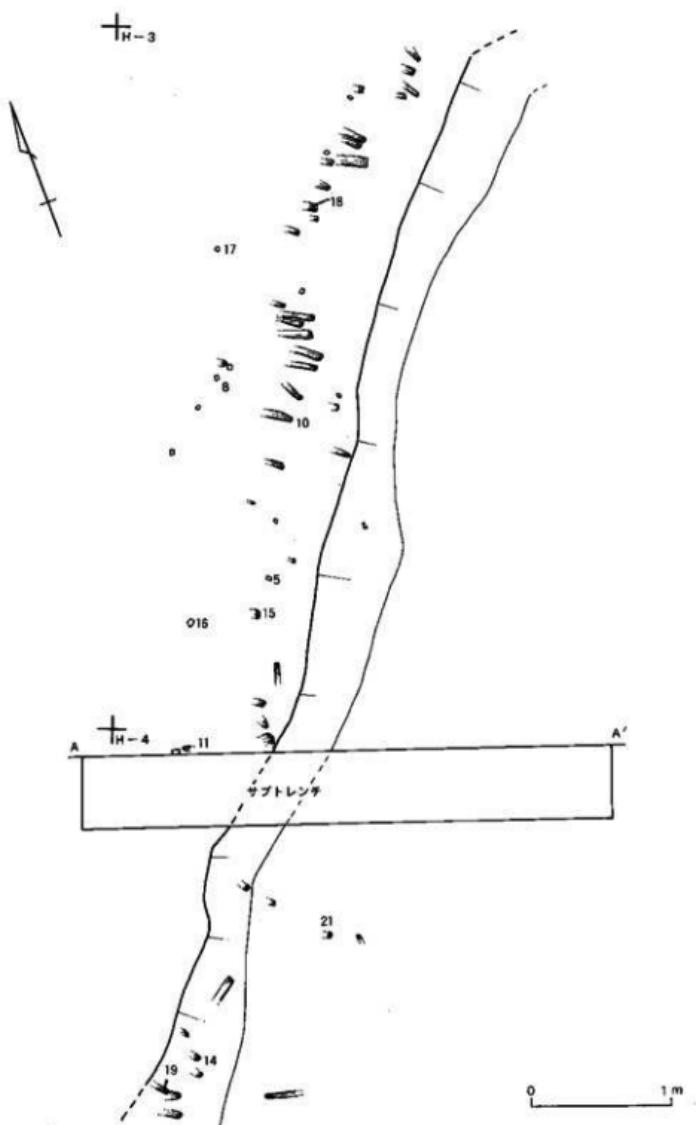
第8図 サブトレンチ断面図



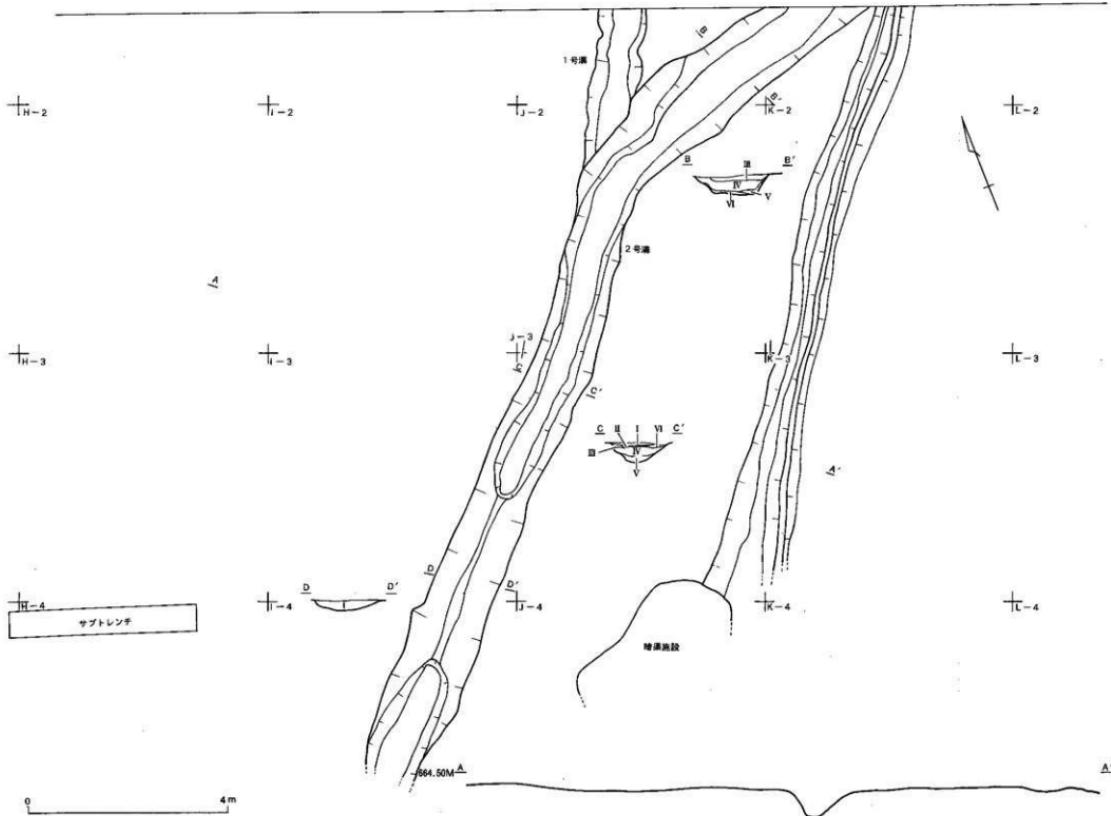
第9図 10畝水田造積実測図



第10図 10層水田造構1号杭列実測図



第11図 10層水田造構2号杭列実測図



第12図 15層水田造積実測図

### 3. 15層水田遺構（第12図）

本遺構は、一部シルトを含む箇所もみられるが比較的安定した黒褐色粘土（15層）を耕土とする水田遺構と思われる。またこれに伴い、二本の溝状遺構と畦畔状の高まりが確認された。これらの遺構は、青灰色シルト層（12層）によって検出できた一面を被覆していたため、比較的容易に検出することができた。しかし、本層の堆積は、南北を帯状に走る低地部にのみ、みられるものであって、H-1～4グリットの中央部から以西には、段部を形成してその堆積が消失する。そして、K-1～4グリットにかけて検出された畦畔状の高まりを持って、やはり15層の堆積はみられなくなる。その幅は、およそ12～13mであり、その広がりには多少変化はみられるであろうが、ほぼ一定して南北につながると思われる。

二本の溝状遺構は、検出面のほぼ中央部にみられそのうち1号溝は、J-1・2グリットに位置し、検出範囲は少ないがN-153°～W方向に流路が続くものと思われるが、2号溝によつて切られている。遺跡確認調査の際に、今回の調査区の北方に設定したトレーンチにおいて、15層と同じ堆積層にもこれと対応される溝状遺構が確認され、北方から続いていることがわかる。溝の幅は80～90cmで、深さは10cm余と浅く、断面はレンズ状に緩やかに凹んでいる。底は、砂礫の堆積がみられ凹凸が目立ち、人為的に構築されていたというよりも、本層の低位部にみられる自然流路であろう。また、2号溝は、K-1グリットからJ-2グリットにかけてN-108°～W方向に流れ、1号溝と重複するあたりで緩やかにカーブし、進路をN-139°～W方向に変え、ほぼ直線状に下る。幅は100～140cmとほぼ一定であり、深さは20～40cmを測る。しかし、断面は本来であればレンズ状を呈していたであろうが（D-D'）、一部を除いて底部の侵食がみられ、半円形ないし台形を呈し（B-B'、C-C'）、17層にまでそれが及んでいる。溝内の堆積（14層）は、侵食の度合で若干の差異はみられるが、6分層された。I層は青灰色シルト層で、15層を被覆する12層に対応できる。II層は黒褐色粘土層で本層に対応される。III層は灰白色細砂層である。IV層は灰色粗砂層で礫を多く含み、土師器片を出土する。V層は灰白色細砂層で粘土及び草木根を多く含む。VI層は暗灰色粘土層で、細砂及び草木根を多く含む。またIV層同様に、土師器片を出土する。尚2号溝は、1号溝と比較すれば、規模・形状ともしっかりと走っているものの、水田に伴う水路的な施設としてはその根拠に大いに欠けるものがある。やはり自然流路としての性格のものであろうか。

また、畦畔状の高まりについても確認できる箇所で5cm余と低く、ほぼ平坦に近いものであるが、それと平行してみられる溝状の凹みがこの高まりを強調している。

尚、本層ないしこれに伴う溝状遺構内より出土した土師器から、本層は古墳時代中期頃に位置づけることができよう。

## 第2節 出土遺物

### 1. 木器（第13～19図）

本遺跡からは今まで、木製の鋤・鋤・田下駄・田舟などの、水田耕作には欠かせない多くの農具類の出土が確認されている。また、水田そのものを築くために使われていた数万本ともいわれる木杭が出土している。今回の調査では、残念ながら前者の農具類は全く出土せず、後者の木杭のみであった。

#### ・木杭（1～22）

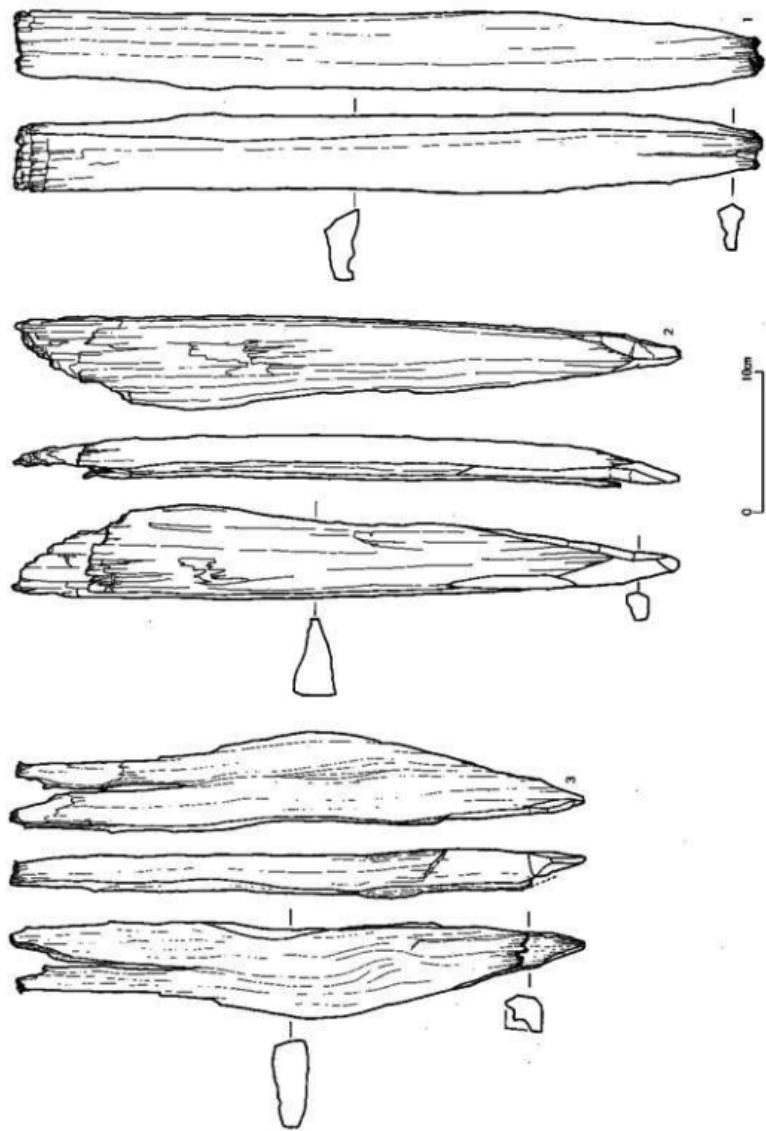
木杭は、全て10層水田面に打ち込まれていたもので、その総数192本である。しかし、そのほとんどが検出時において既に腐食が進行しており、取り上げは慎重を期したが破損を免れないものもみられた。特に、頭部においての破損状況が著しく、打ち込まれた当時の様子をうかがえるものは少ない。よって、残存状態の良いものだけに限って、その加工状況の観察により、分類を試みた。木杭の材質は全てサワラ材を用いており、打ち割り法によるみかん割り製材で木取りを行なっていた。また、先端部の加工は金属製の鋭利な刃物を使用して、数回の打撃により尖らせている。

1類—木口が三角形またはそれに近い台形を呈するもので、柾目を基本としている。その中ににおいても、板状を呈するもの（1～4）と、棒状を呈するもの（5～7）とに更に分けられる。先端は、三角形の鋭角にまず打撃を加え、更にその側面への打撃が加えられる。本類は、比較的細い素材から製作されたものである。

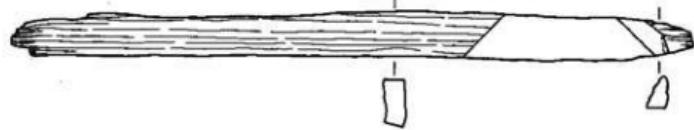
2類—木口が正方形ないし台形を呈し、柾目を基本とする角材（12～22）であり、出土中にそれの占める割合が最も高い。先端部への加工は、四角形の頂点の打撃が主であり、1類に比べると、その回数は増える。中には、20～22のように、側面への1ないし2回の打撃のみで先端部を作り出しているものもみられる。また、19・20にみられる、比較的長いものも、この類には珍しくない。

3類—木口が長方形を呈するもので、1、2類に対して板目を基本としている板材である（8～11）。先端部は、長方形の両短側面に対して打撃を加え尖らせており、矢板の製法と近似する。また、1・2のように、1側面への数回に渡る打撃を加えて作り出しが行なわれる製法とちがい、他に余りみられない大きな特徴といえる。比較的太い原木を素材としている。

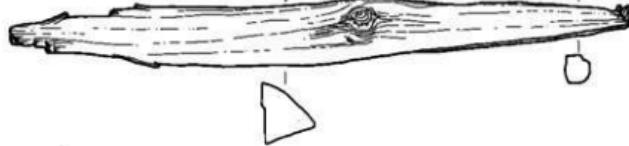
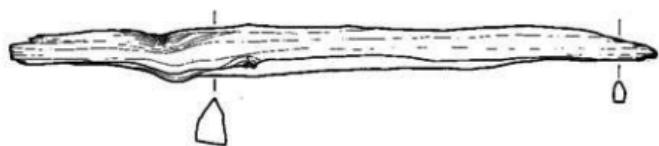
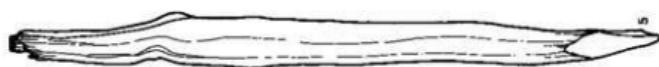
以上のように、その加工状況によって3分類されたが、材質・木取り・先端部への加工など全て共通性を伴っており、ほぼ一時期に製作されたとの予測ができる。しかし、同じ材質を用いながらも太さの様々な原木を無駄なく使い、それに応じた加工を行なうことによって、多量の木杭を製作する必要性が、湿地帯における水田造成の難しさを物語っていると言えよう。また今回、丸材や他の材質を用いたものは確認されなかったが、過去にも出土した類例があるこ



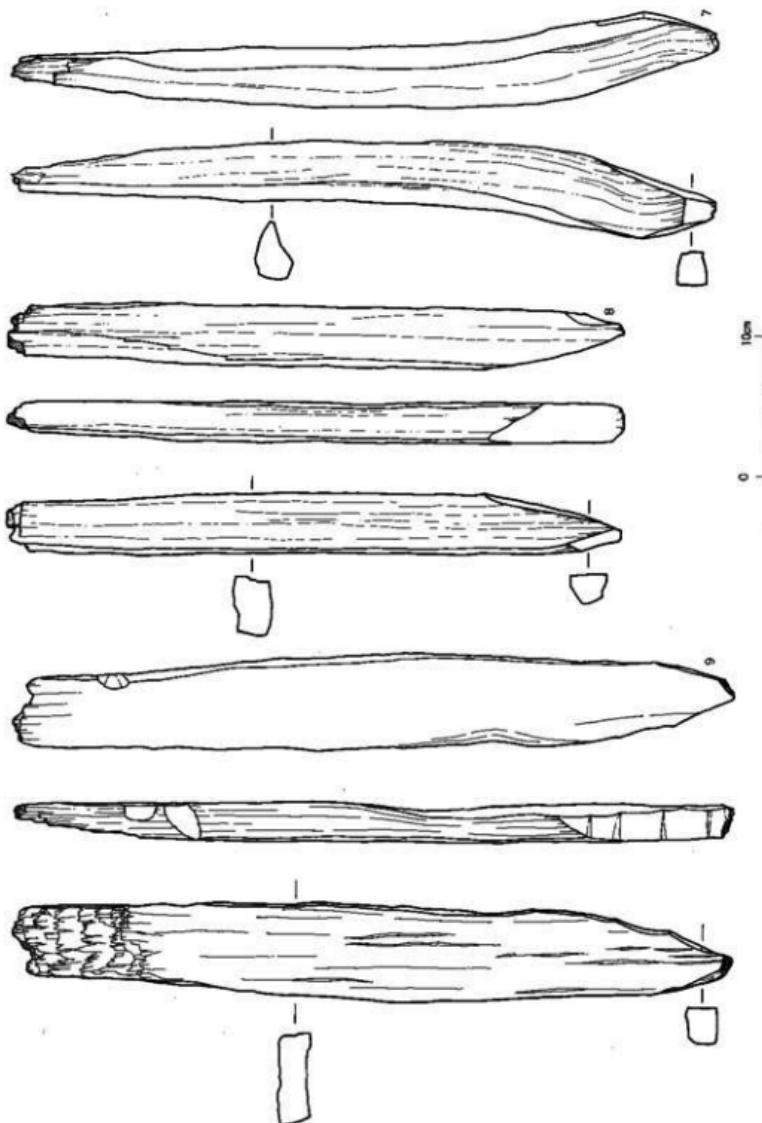
第13図 出土木枕実測図 1



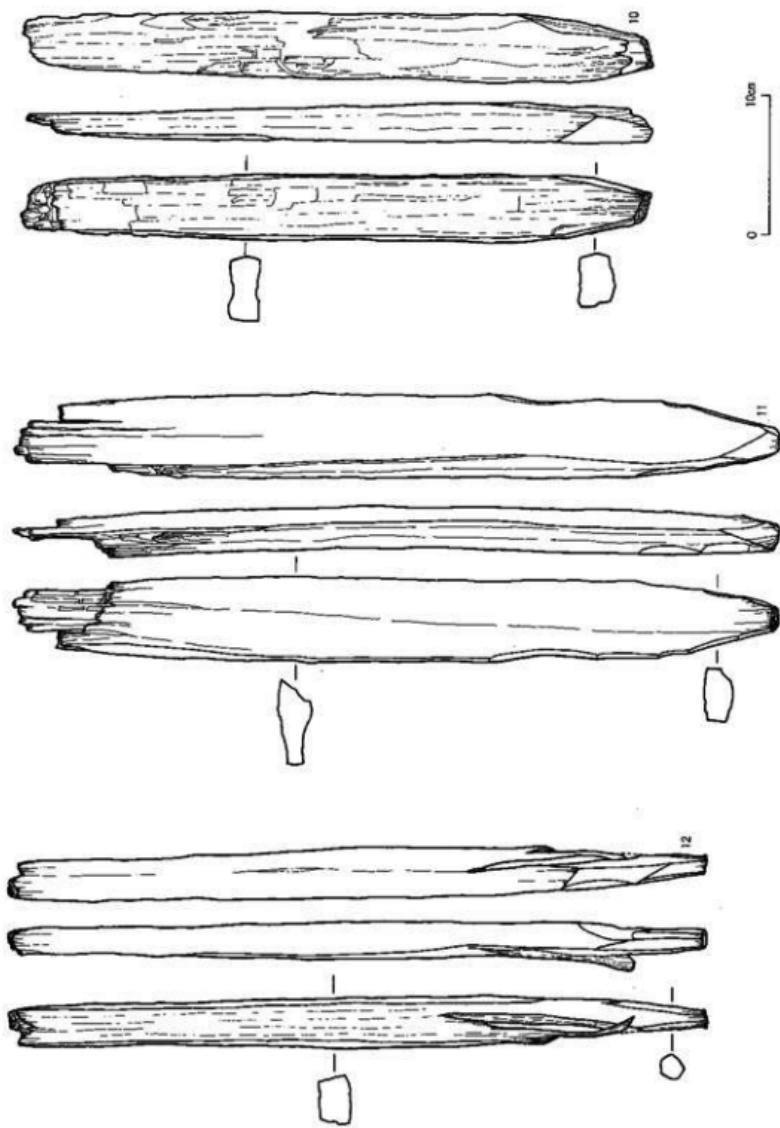
10cm



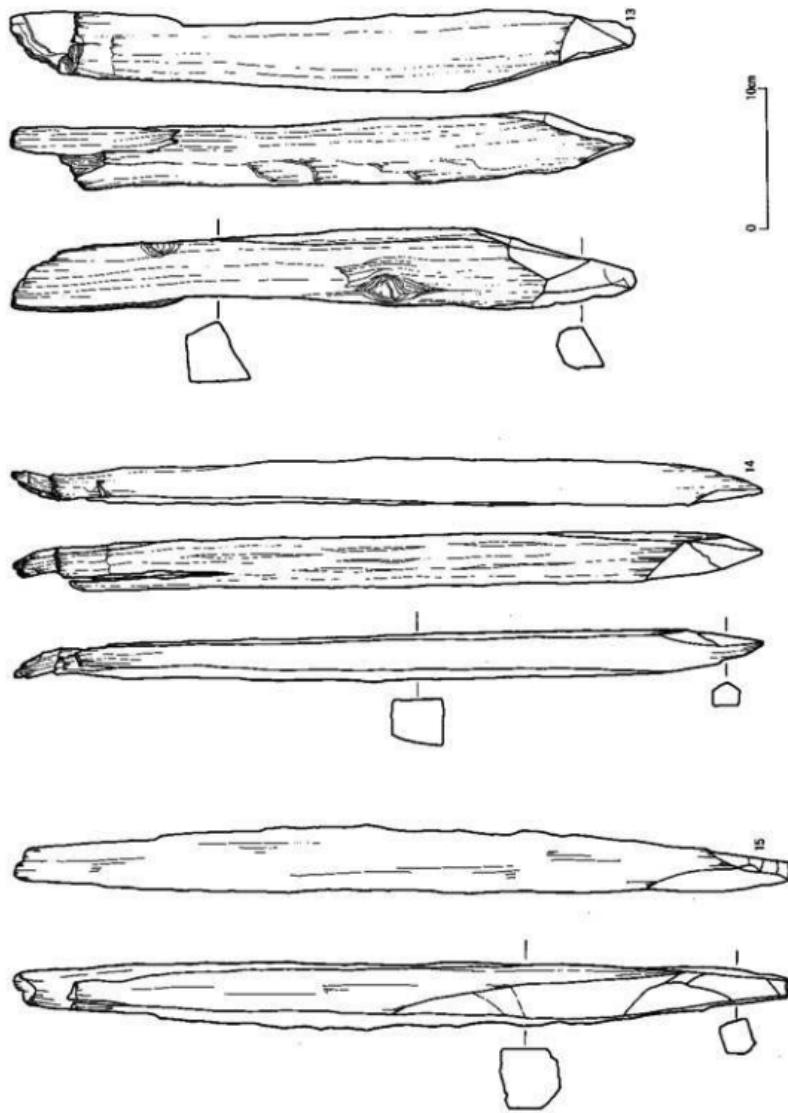
第14図 出土木杭実測図 2



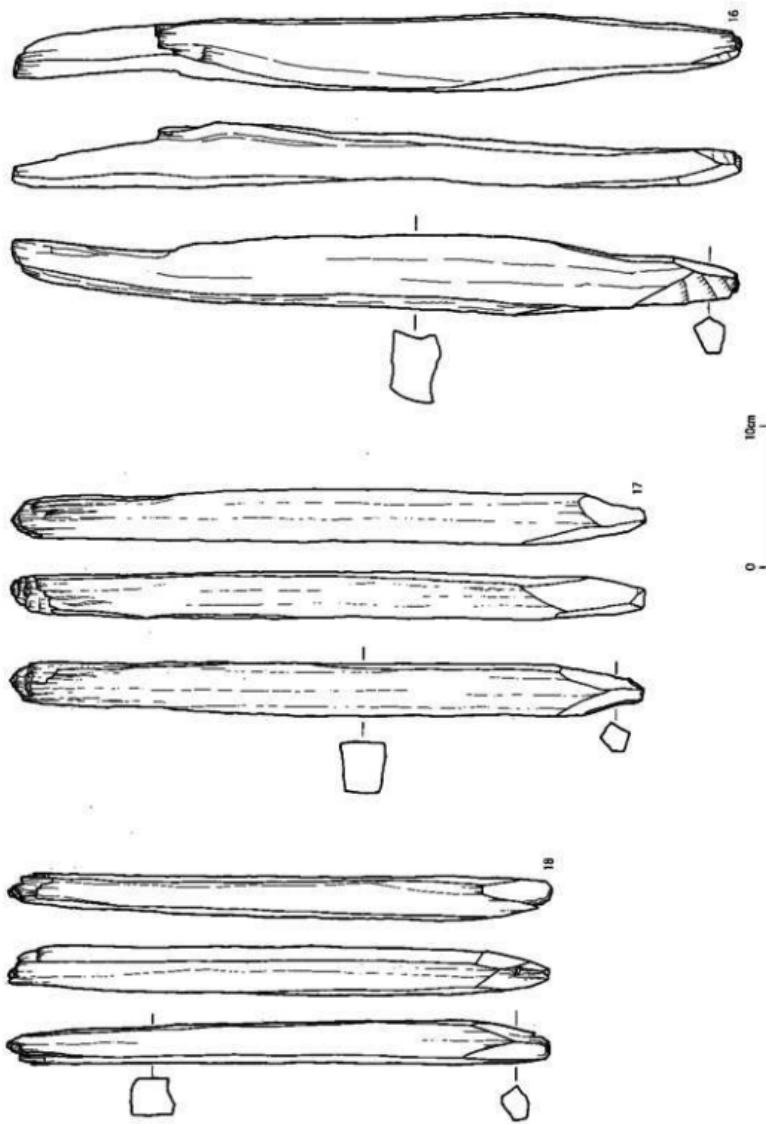
第15図 出土木杭実測図 3



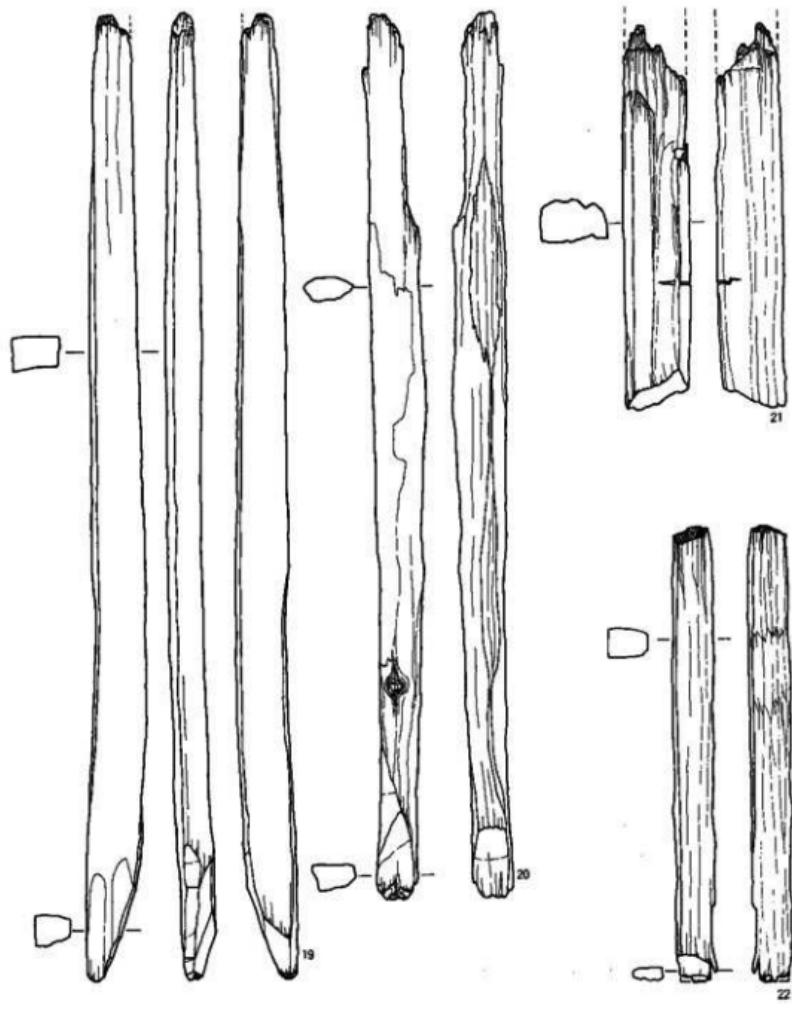
第16図 出土木杭実測図 4



第17図 出土木杭実測図 5



第18図 出土木杖実測図 6



第19図 出土木棺実測図 7

とから考えて、これらも同様に使用されていた可能性は高い。

## 2. 土器（第20図）

今回の調査では、土層堆積状況を把握することによって層位的な遺物の検出に努めた。特に土器類については、各層の時代を決定づける大きな要素であることはもちろん、その器種構成により各時代の社会背景を探る手がかりとなろう。土器類は、2、6、10、15層からの出土が主で、縄文土器、土師器、須恵器、土師器系土器、陶器、磁器に分別され、一部を除くほとんどが破片によるものであった。その出土点数では、土師器が圧倒的に多いものの、2、6、10層において陶器、磁器などと共に伴しているもの多いため、あまり時代決定の要素にはならない。また、土師器系土器（中世以降）との判別ができないもの多いため、両者が混在している可能性を指摘できよう。陶器、磁器については、中世後半から近・現代までの時代的幅がみられるが、やはり各層に混在しており、層位的に捕らえることはできなかった。各層の出土状況については、下表を参照されたい（第2表）。

第2表 出出土器総数一覧表

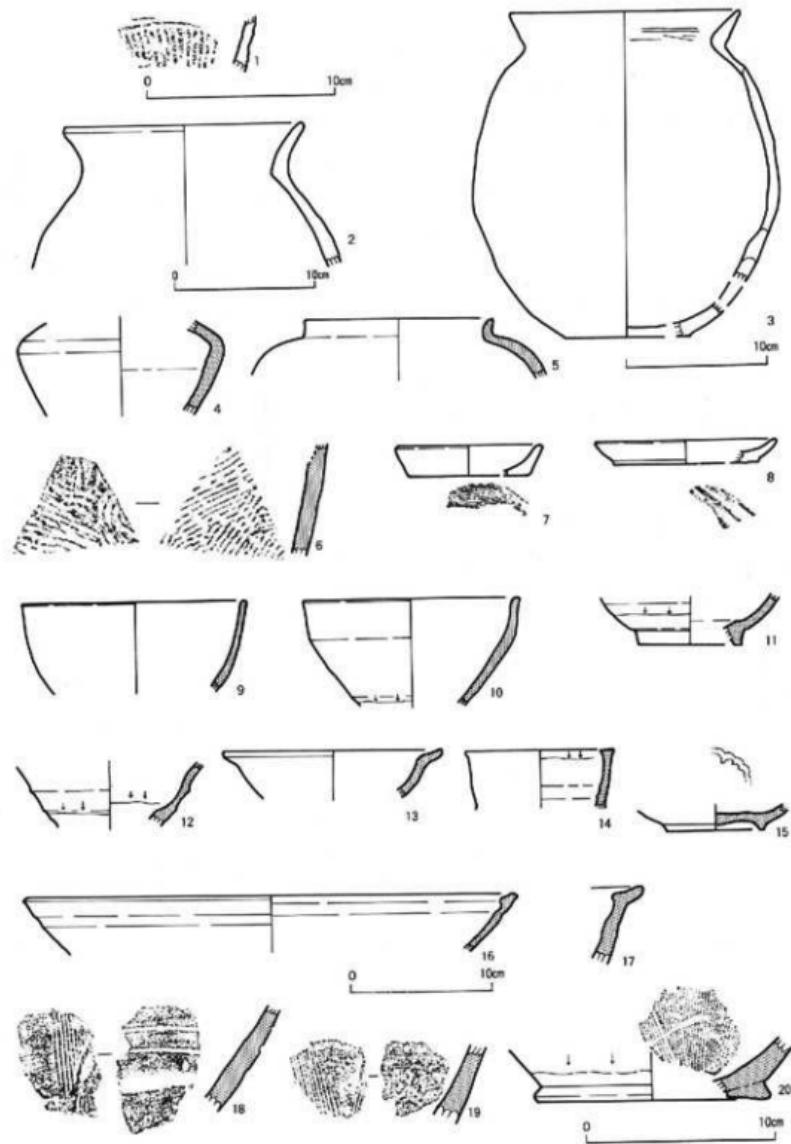
層別	縄文土器	土師器	須恵器	土師器系土器	陶器	磁器	計
2	1	22	3	4	29	10	69
6	0	42	1	14	56	10	123
10	0	31	6	0	8	0	45
15	0	4	0	0	0	0	4
表掲・トレンチ その他	0	12	2	0	4	0	18
計	1	111	12	18	97	20	259

### ・縄文土器（1）

今回の調査区で縄文土器の出土は、2層中より出土した1点のみであった。1は、半截竹管状工具により横位・縱位に沈線を施すもので、縄文時代中期初頭の梨久保式に比定できよう。

### ・土師器（2・3）

2・6・10層を通じ、壺（内面黒色処理を施すものも含む）、甕、壺が確認できるが、古墳時代のものと、奈良・平安時代のものとが混在している。また、15層ないしそれに伴う溝中よりまとまった出土がみられた。2は、2号溝より出土した甕で、胴部上位から口縁部にかけてのみ残存するものだが、口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は大きく膨らんで球状を呈すると思われる。また口縁端部は、面取りされる。3の甕は、口縁部が「く」の字状に外反し、球状に膨らみをみせる胴部形態で、2と近似する。2・3は、内外共に、ナデによる調整がなされているが、3は内面に一部ハケ調整の痕跡が残る。尚、壺の底部片も本土層中より出土している。これらは一括して、古墳時代中期に位置づけられよう。



第20図 出土土器実測図・拓影図

#### ・須恵器（4～6）

出土した須恵器はすべて破片ばかりでその量も少なく、土師器と同様に陶器・磁器などと混在している。4は、琳と思われる胴部片で、肩が強く張りをみせる形状である。胎土はよく精選され、焼成は良好であり、色調は灰色である。5は、短頸壺の口縁部片であり、やや外反気味に短く直立する口縁部で、胴上位に最大径を有する肩の張る形状を示す。胎土はよく精選され、焼成は良好であり、色調は赤褐色を帯びた紫色を呈している。また、外面及び口縁部内面に自然釉の付着が認められる。共に古墳時代の中～後期に属し、東海地方か陶邑所産の可能性がある。6は、外面は平行、内面は同心円状の叩き目を施す大壺の胴部である。胎土はよく精選され灰白色を呈し、焼成は良好である。奈良・平安時代に比定され、美濃須恵器と思われる。

#### ・土師器系土器（7・8）

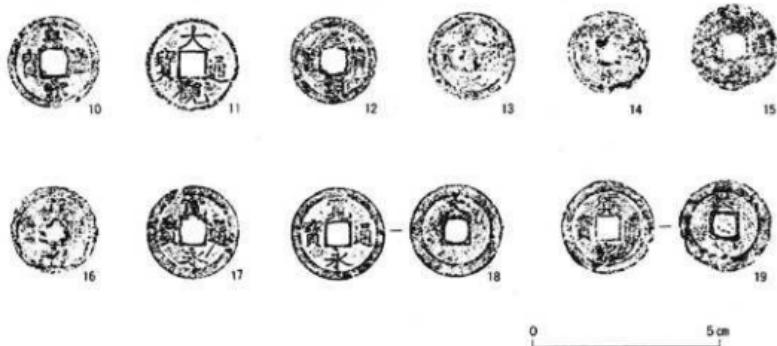
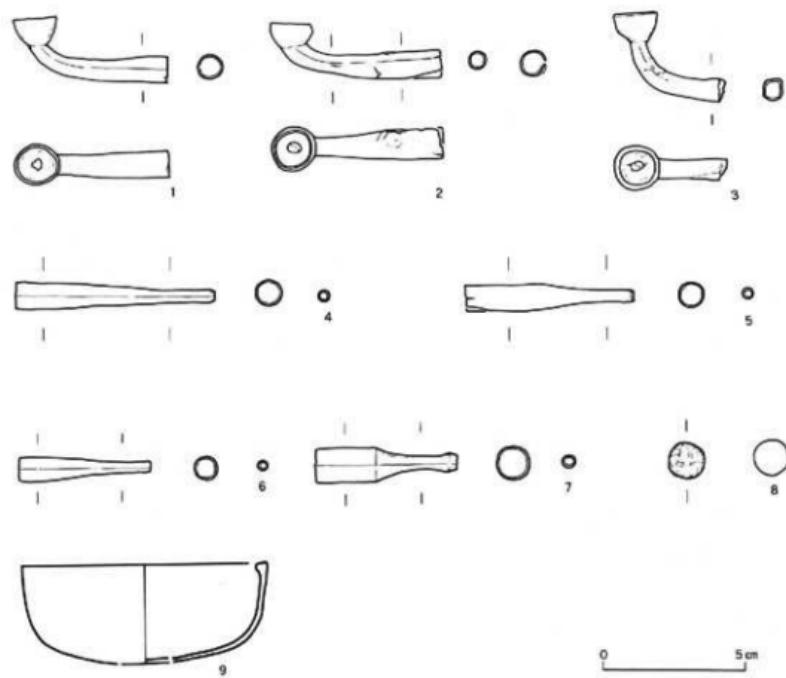
明らかに土師器系土器として判別できるものは18点で、そのうち16点が内耳土器（内耳部の確認できるものも含まれる）である。他の2点は小皿である（7、8）。7は、やや外反ぎみに立ち上がる形態で、内外面にヨコナデが、底部に糸切り痕が確認できる。8は、内湾ぎみに立ち上がる形態を呈し、ロクロ成形で切り離された後に台部の取り付けを行なっている。内外面にナデが、底部はヘラケズリ後の板状工具による圧痕が確認できる。共によく精選された胎土で焼成もよく、白色を帯びた橙色を呈する。

#### ・陶器・磁器（9～20）

まず陶器については、中世後半から近世初頭（9～15）、近世前～中期（16～19）、近・現代（20）とに大別されよう。

中世後半から近世初頭にかけての出土陶器の器種を概観すると、碗（丸茶碗、天目茶碗）、香炉・皿（丸皿、小皿）、仏花瓶などがみられ、あまり一般庶民には係わりがないと思われるものが目立つ。9は、灰釉丸碗で緩やかに立ち上がる口縁形態をする。灰白色を呈する良質な胎土で、釉薬が内外面にみられる。10は、天目茶碗で胴部上位に段を持って直立ぎみに口縁部が立ち上がる。胎土は良質で灰白色を呈する。11は、鉄釉天目茶碗の底部で高台は削り出しによるものである。胎土は良質で灰白色を呈する。また内面に、重ね焼きによる釉薬のはげた状況が観察できる。12は、持腰型の鉄釉香炉である。外面に明瞭な段を残し、内面底部までの釉薬掛けをしていない。胎土は良質で灰白色を呈する。13は、鉄釉仏花瓶で口縁部が鶴状に外反する形状である。胎土は良質で灰白色を呈する。当時の輸入銅花瓶形を模倣したものであろう。14は、筒型の灰釉香炉である。口縁端部は偏平で内面に折り返しがみられる。胎土は良質で灰白色を呈する。15は、灰釉印花文小皿で高台は削り出しによるものである。胎土は良質で白色を呈する。また、二次焼成を受けており、断面にススの付着が認められる。いずれも瀬戸・美濃産である。

近世前～中期のものでは、碗・すり鉢がみられるが、特にすり鉢の出土数が目立つ。16は、



第21圖 出土金屬器、錢貨實測圖・拓影圖

鉄釉すり鉢の口縁部のみの破片であり、口縁部内面に折り返しがみられる。胎土は良質で灰白色を呈する。17も鉄釉すり鉢の口縁部のみではあるが、「く」の字状に屈曲して口縁部が外反をみせる。胎土は良質で白色を呈する。18の鉄釉すり鉢は、外面に2本の沈線が横位に、内面には5本一単位の櫛目が放射状に施される。胎土中に長石などの小礫を含み、白色を呈する。19の鉄釉すり鉢も、外面に2本の沈線が横位に施されるが途切れている。内面には単位は不明であるが放射状に櫛目が施される。いずれも瀬戸・美濃産である。

近・現代のものでは、碗、すり鉢などがみられるが、特に古田焼きと思われる在地産のものが確認できる。20は、鉄釉すり鉢で高台が取り付けられた後、更に削り出しによる調整が施される。胎土はよく精選され、赤褐色を呈する。在地産の可能性が高い。近世末から近代にかけての位置づけができるよう。

また、磁器については、近世末から近代にかけての染付の碗や、15~16世紀の中国青磁片もみられる。しかし、いわゆる「セトモノ」と呼ばれる現代のものが大半を占めている。特に中国青磁は、2点のみでしかも小破片ではあるものの、本遺跡の性格を知る上で特質すべきものといえよう。

### 3. 金属器（第21図1~9）

1層~10層にかけて多数の金属器を出土している。煙管などの近世遺物の他、ワイヤーロープや鐵板、腕時計など現代遺物が混在する。

#### ・煙管（1~8）

雁首部が3点、吸口部が4点出土しており、すべて銅製である。1の雁首は、首部の脂返しが大きく湾曲する、いわゆる「河骨形」と呼ばれる形態をとるものであり、火皿と首部の接合部に補強帶はない。首部に肩ではなく、銅板を丸めて管状にした際の接合部が残る。2の雁首は、1と同様に河骨形に属するが、1と比べると脂返しの湾曲が小さい。3の雁首は、首部が一部欠損するものの、1・2と同様に河骨形に属し脂返しの湾曲は大きい。4~6は、肩部を持たない吸口部で、先端でやや膨らみを有する。銅板を丸めて管状にした際の接合部が残る。7の吸口部は、肩部を明瞭に残してはいるが技法は4~6と同様に、銅板を丸めて管状にした際の接合部が残ることから、一体であることがわかる。先端はそろばん玉状に膨らみをみせる。またすべてに、ラウの痕跡はみられない。尚、1・6・7は6層中から、2~5は2層中からの出土である。

#### ・火縄銃の弾丸（9）

9は、火縄銃の弾丸で鉛製である。表面はざらついていて凹凸が目立ち、灰白色を呈している。10層中より出土している。

#### ・仏具（10）

10は、仏具に属する小華である。口縁部はほぼ平に面取りされ、内側にやや折れ曲がりがみ

られ、丸底で碗状を呈する。真鍮による鉄物であり、暗渠施設内より出土している。また、時期の詳細は不明である。

#### 4. 銭貨（第20図10～19）

調査区から、計15点の銭貨が出土しており、内5点が宋錢で残りはすべて寛永通宝である。宋錢は、1の皇宋通宝、2の大觀通宝、3の元豐通宝が文字の解読が可能であるもので、他の2点は残存状況が悪く解読できない。特に2は、表面の周縁に鋳造後と思われる刻み目が確認される。すべて6層中より出土している。

寛永通宝は、13～16の4点を含む7点が畦畔状遺構より重なった状態で一括出土している。その内の図化されない3点は鉄製で、鑄の進行が著しく文字の解読はできない。17～19は、6層より出土しており、18・19は裏面に「文」の文字が確認できる。

尚、これらの遺物の外に、量的には少ないが食物性自然遺物（主に種子類）が出土している。それらは、おにぐるみ・ひめぐるみ・ももなどで、穀や炭化米など稲作に直接結び付くようなものは確認できなかった。

## 第V章　まとめ

箕輪遺跡における発掘調査は、国道153号線箕輪バイパス工事に伴って昭和55年に始まり、今回で第7次の調査となる。特に今年度は、木下公民館建設に伴う大清水地籍での調査（第5次）と、本事業に伴う遺跡確認調査（第6次）も実施されている。その内容については、別刊にて詳細に報告するものである。今回の調査地である城安寺地籍は、南北に帯状に広がる遺跡範囲の中央部でかつ東側限界域に位置し、天竜川の堤防に隣接している。そのため、現在の堤防が築かれる以前においては、常に天竜川の氾濫による水害の危険性が高い場所であり、水田経営は不可能ではないかと思われた。しかし、確認調査によるプラントオパールの分析結果と木杭等の遺物の出土から、稲作の実態が浮かび上がってきた。そして行なわれた調査の結果については、前章にて述べてきたが、ここではそれについて若干ながら考察を試み、今後の課題と展望を加えてまとめとしたい。

確認調査によって、掘削したトレーナーにみられる土層堆積状況と、現在もわずかながら残る古地形の分析によって、町田橋の南側からほぼ南北に縦走する低地が存在する（付図1参照）。この低地は、古川と呼ばれる天竜川の旧河道であり、調査によって明らかにされた各遺構は、この旧河道に添って隣接する、その幅20m前後の湿地部に埋没していた。今回の調査はこの湿地部の一部を調査したに過ぎないが、水田経営になんらかの関連性がある畦畔状遺構と10・15層の2面の水田遺構の検出に至った。まず畦畔状遺構についてであるが、水田を区画するいわゆる畔とは断定しがたい。旧河道とほぼ平行して、南北への広がりが予測されるものの、現況においてみる限り、近世における小規模ながらも水及び土砂の流入を防ぐための堤防状の施設という見方が妥当と思われる。それは、天竜川に隣接して稲作を行なうには、必要不可欠のものといえるだろう。そしてその下層から、杭列によって畦畔を形成する、出土遺物は微量ではあったが、中世後半に比定されよう10層水田遺構が検出された。杭列は、湿地部の東側限界部に旧河道と平行してみられ、また杭のほとんどが意識的に同一方向から斜めに打ち込まれていた。昭和56・57年の調査では例の無い、今回が始めてのものと言える。このような杭の打ち込み状況は、確認調査において調査区の北方からこれと対応する層から検出しており、それがつながって同一の杭列を形成していることが指摘される。これによって、本水田遺構が旧河道に添って南北に広がることが想定できよう。また15層については、プラントオパール分析によって水田土壤として良好との結果が得られ、調査を実施し出土遺物によって古墳時代中期に比定される文化層であることが判明した。しかしその検出範囲も狭く、水田としての決定的な根拠を見いだすことはできなかった。

さて、箕輪遺跡が世間一般に注目されて以来40年余になるが、その間小池・小川両氏の御努

力と幾度かの調査が実施され、少しづつその内容が明らかにされてきた。今回もそれを知る一段階に過ぎないが層位的かつ科学的見地に立っての調査は、初めて行なわれた。それによって新たに知り得たことも多かったが、それと同時に多くの問題点も残してしまった。水田を中心とする低湿地性の遺跡に対する知識と経験不足に加え、広大な遺跡地のごく限られた範囲での調査は、よりその内容・性格を理解するための大きな障害となっている。しかし、現在進行している開発の波は、次第に大きくなりつつあり、より早い遺跡の解明が必要とされている。そして今後予測される遺跡の調査には、より綿密な事前調査と情報交換が必要不可欠なものとなるだろう。またそれ以上に、いかにして保護し後世に伝えていくかが最大の課題といえる。今回の調査結果もふまえて、より多くの人々の理解と協力のもとに、この問題に取り組んで行かなければならない。

末筆になりましたが、連日の猛暑の中調査の進行にご努力・ご協力いただきました団員の方々に、厚く御礼申し上げます。

#### 参考文献（編著者名50音順）

- |           |  |
|-----------|--|
| 浅野猪久夫     | 1982 木材の辞典 朝倉書店                        |
| 岡本省吾他     | 1977 原色日本樹木図鑑 保育社                      |
| 飯田市教育委員会  | 1988 「恒川遺跡〈田中・倉垣外地籍〉」                  |
| 大場磐雄      | 1964 「上伊那郡箕輪町発見の祭祀遺物」伊那路8-1            |
| 上伊那誌刊行会   | 1965 長野県上伊那誌 歴史編                       |
| 上郷町教育委員会  | 1989 「一丁田・ヒエ田遺跡」                       |
| 小池修兵      | 1958 「箕輪遺跡第3回の報告にかえて」伊那路2-5            |
| 古泉 弘      | 1985 「江戸の街の出土遺物」季刊考古学第13号              |
| 古泉 弘      | 1990 「江戸を掘る」柏書房                        |
| 静岡市立登呂博物館 | 1986 「木の文化—古代木匠たちの伝説」                  |
| 柴登巳夫      | 1982 「箕輪遺跡出土の人形」伊那路26-3                |
| 柴登巳夫      | 1985 「弥生時代の箕輪」伊那路27-6                  |
| 柴登巳夫      | 1986 「箕輪町の遺跡と遺物—沖積面の遺跡」箕輪町誌 歴史編        |
| 高橋 学      | 1989 「埋没水田遺構の地形環境分析」第四紀研究27-4          |
| 高橋 学      | 1990 「発掘調査のための地形環境分析」帝京大学山梨文化財研究所所報10号 |
| 長野県史刊行会   | 1981 長野県史 考古資料編 全1巻(1) 遺跡地名表           |
| 長野県史刊行会   | 1985 長野県史 考古資料編 全1巻(3) 中・南信版           |
| 長野県史刊行会   | 1988 長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物           |
| 長野市教育委員会  | 1989 「石川条里遺跡(4)」                       |

中村 浩	1981 「和泉陶邑窯の研究」 柏書房
奈良国立文化財研究所	1980 「層位・遺跡断面等の剥ぎ取り転写法」 埋蔵文化財ニュース28
日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡考古学会	1988 「日本における稻作農業の起源と展開」 日本考古学協会設立40周年記念シンポジウム
藤沢宗平	1954 「箕輪遺跡にみる農業と文化」 農業信州
藤沢宗平	1955 「長野県上伊那郡箕輪遺跡について」 信濃7-2
箕輪史研究会	1954 「箕輪遺跡報告」 箕輪史研究資料第2集
箕輪史研究会	1954 「箕輪遺跡中間報告」 箕輪史研究資料第3集
箕輪町教育委員会	1980 箕輪遺跡 第1集
箕輪町教育委員会	1981 箕輪遺跡 第2集
箕輪町教育委員会	1982 箕輪遺跡 第3集
箕輪町教育委員会	1983 箕輪遺跡 第4集

#### 付載1 木製品及び腐植土の絶対年代測定結果報告

今回出土した木製品（木杭）及び腐植土について、社団法人日本アイソトープ協会に依頼し年代測定を行なった。参考資料とされたい。

年代は $^{14}\text{C}$ の半源期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）に基づいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（years B.P.）として示されている。付記された年代誤差は、放射線計算の統計誤差と、計算管のガス封入圧力および温度の読み取り誤差から計算されたもので、 $^{14}\text{C}$ 年代がこの範囲に含まれる確率は70%である。この範囲を2倍に拡げますと確率は95%となる。なお、 $^{14}\text{C}$ 年代は必ずしも等しくないことに注意されたい。

番号	コード	試 料	C-14年代
1	N-5806	20層内木質物	$1840 \pm 85\text{yB.P.}$ ( $1790 \pm 90\text{yB.P.}$ )
2	N-5810	10層腐植土	$1470 \pm 90\text{yB.P.}$ ( $1420 \pm 90\text{yB.P.}$ )
3	N-5811	15層腐植土	$1880 \pm 85\text{yB.P.}$ ( $1830 \pm 80\text{yB.P.}$ )
3	N-5812	16層腐植土	$3500 \pm 150\text{yB.P.}$ ( $3400 \pm 150\text{yB.P.}$ )
4	N-5813	20層腐植土	$2500 \pm 85\text{yB.P.}$ ( $2440 \pm 85\text{yB.P.}$ )
5	N-5821	10層出土木杭	$890 \pm 75\text{yB.P.}$ ( $860 \pm 70\text{yB.P.}$ )
6	N-5822	10層出土木杭	$780 \pm 75\text{yB.P.}$ ( $760 \pm 70\text{yB.P.}$ )
7	N-5823	10層出土木杭	$890 \pm 75\text{yB.P.}$ ( $890 \pm 70\text{yB.P.}$ )

# 図 版



遺跡地航空写真



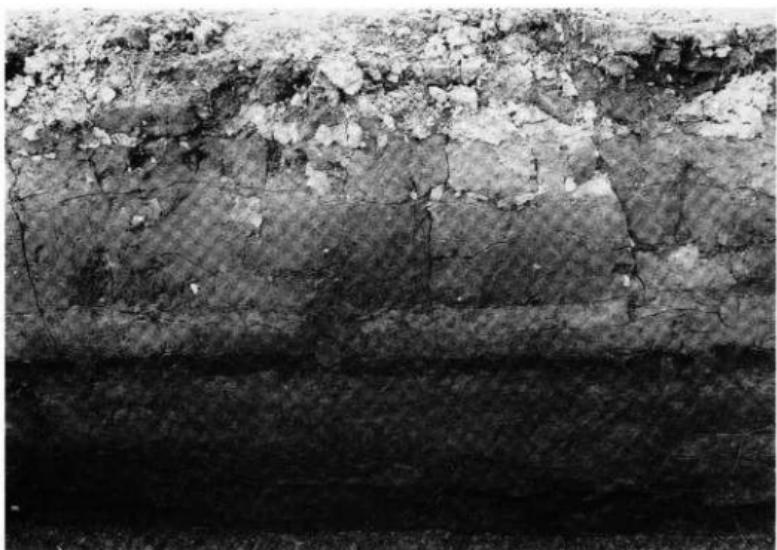
遺跡地遠景（西方より）



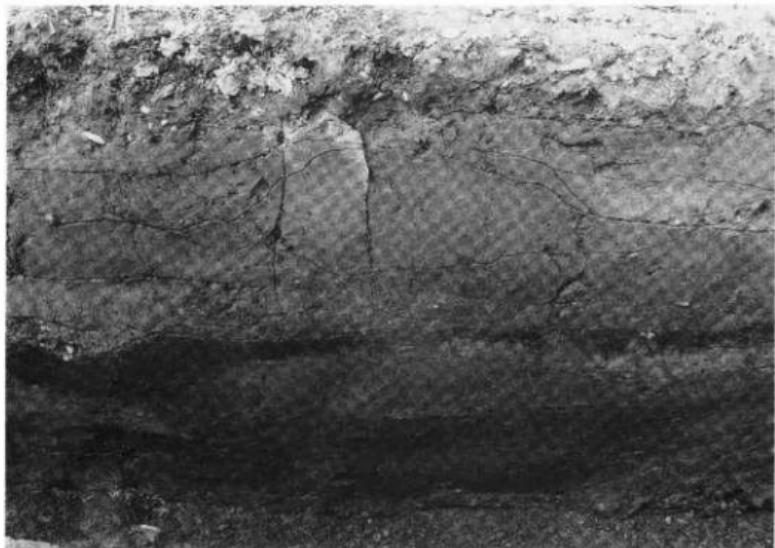
調査地近景（南方より）



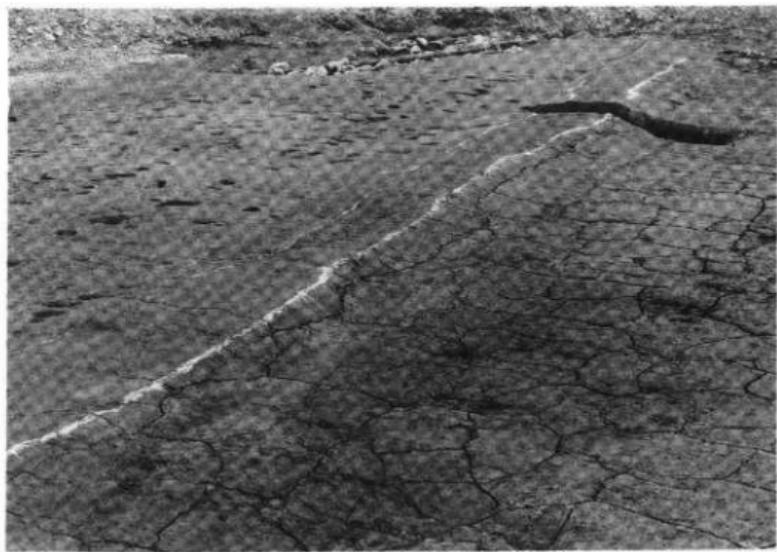
B トレンチ掘削状況



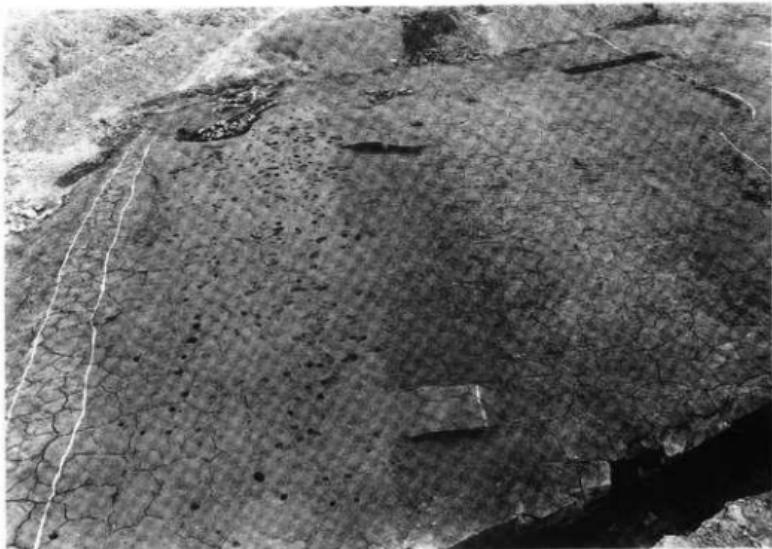
B トレンチ土層断面 1



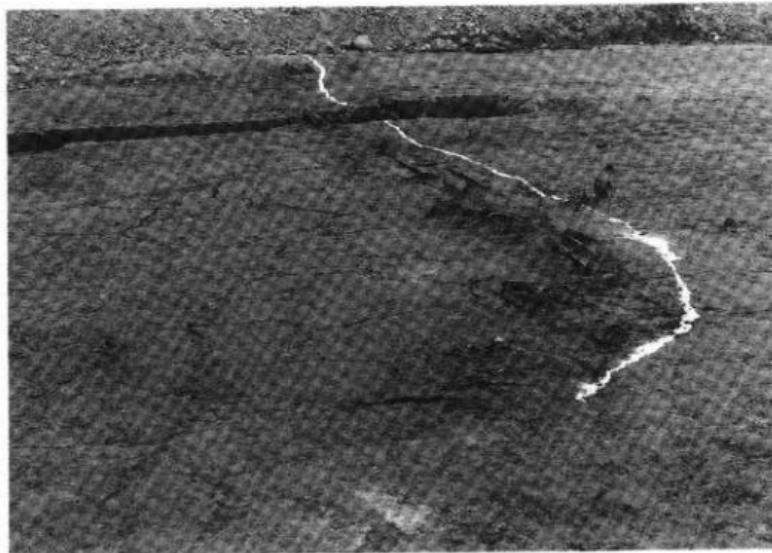
B トレンチ土層断面 2 (畦畔状遺構断面状況)



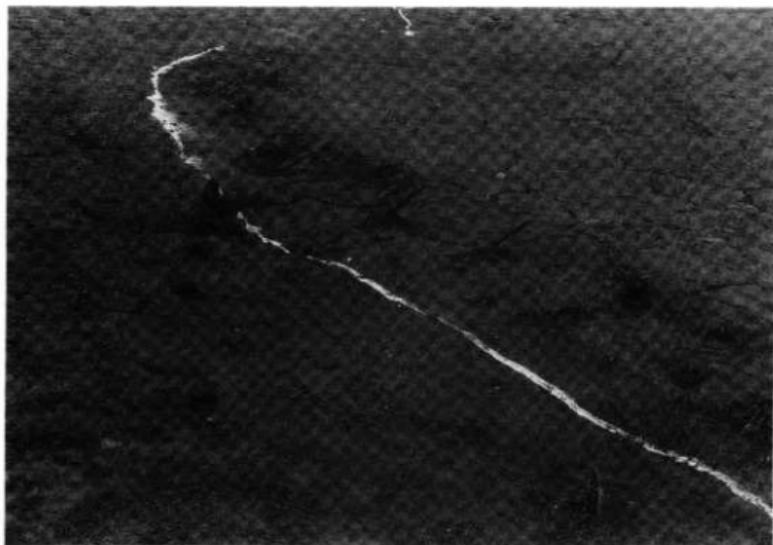
畦畔状遺構



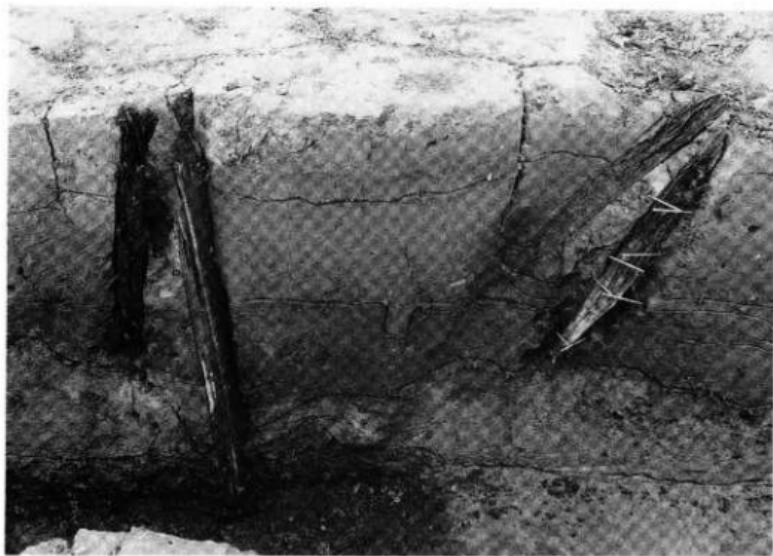
10層水田遺構



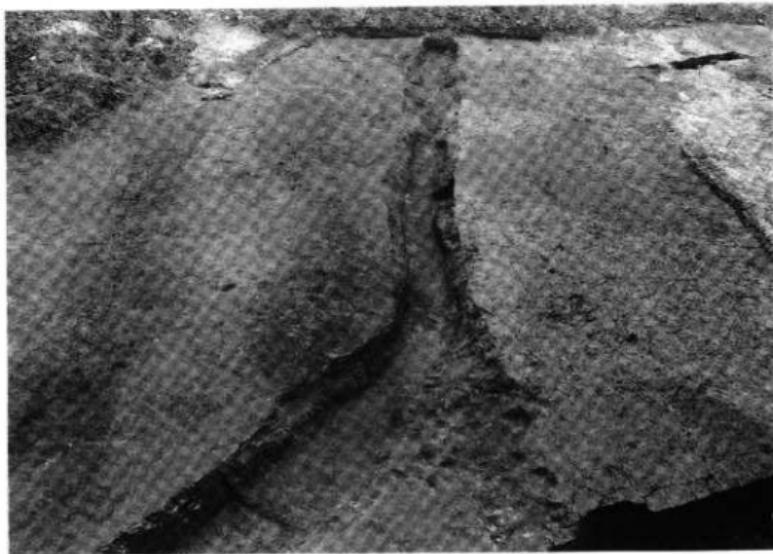
10層水田遺構杭列（北方より）



10層水田遺構杭列（南方より）



杭列打ち込み状況



15層水田遺構

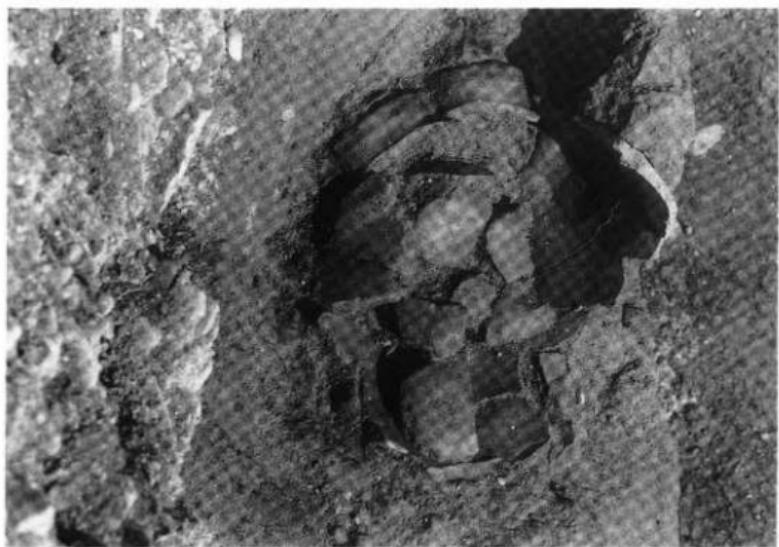


15層水田遺構内溝状遺構

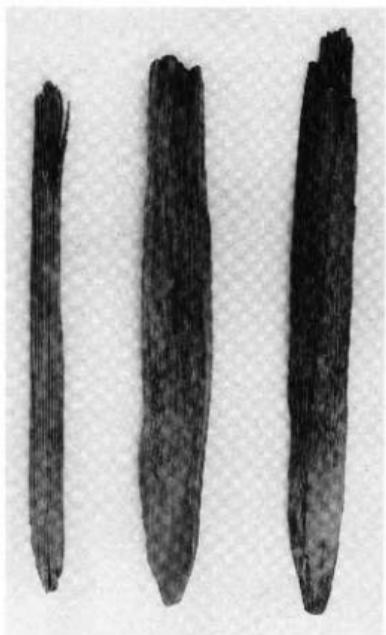
図版  
8



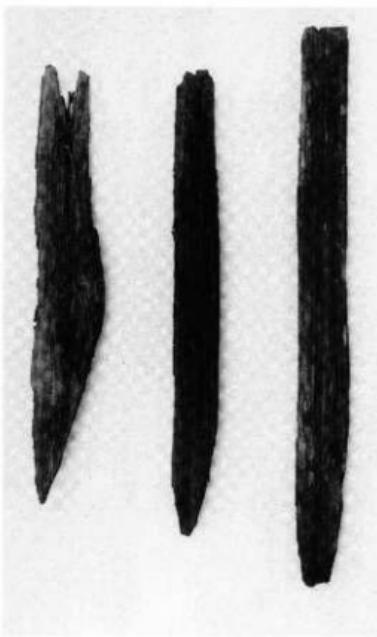
溝状遺構土層断面



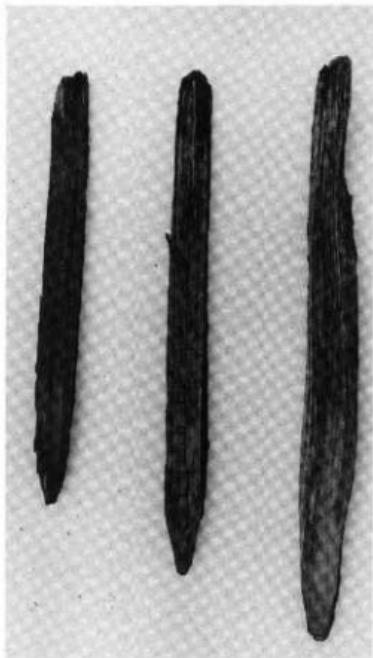
B トレンチ遺物出土状況



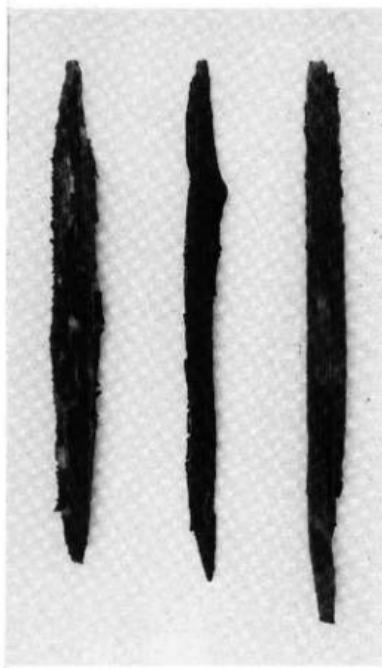
出土木杭 1



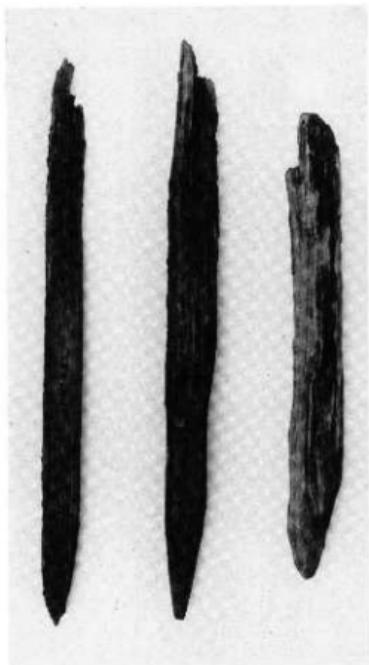
出土木杭 2



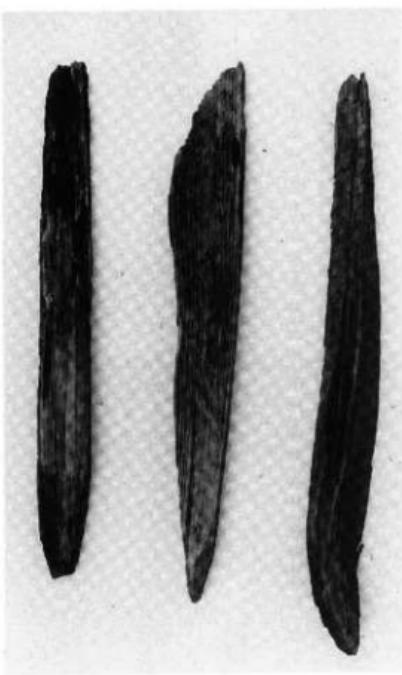
出土木杭 3



出土木杭 4

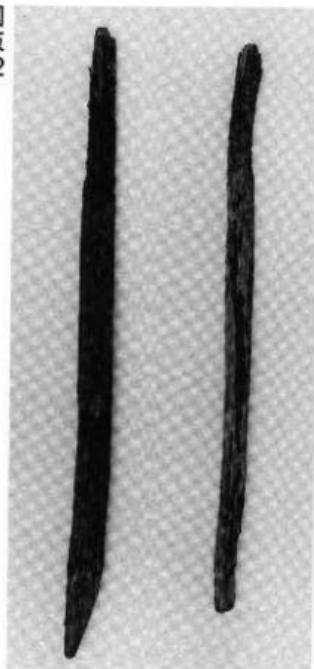


出土木杭 5

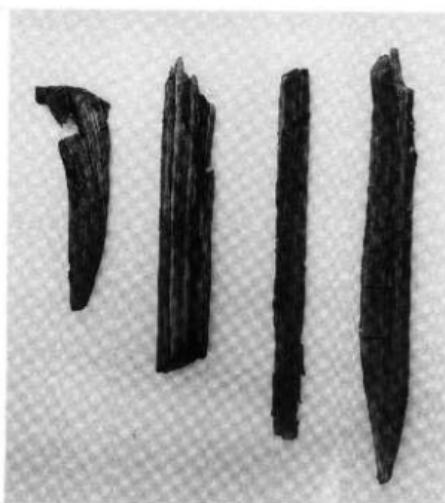


出土木杭 6

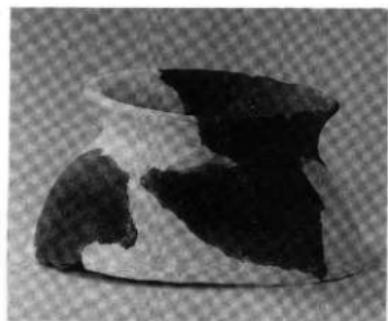
圖版  
12



出土木杭 7

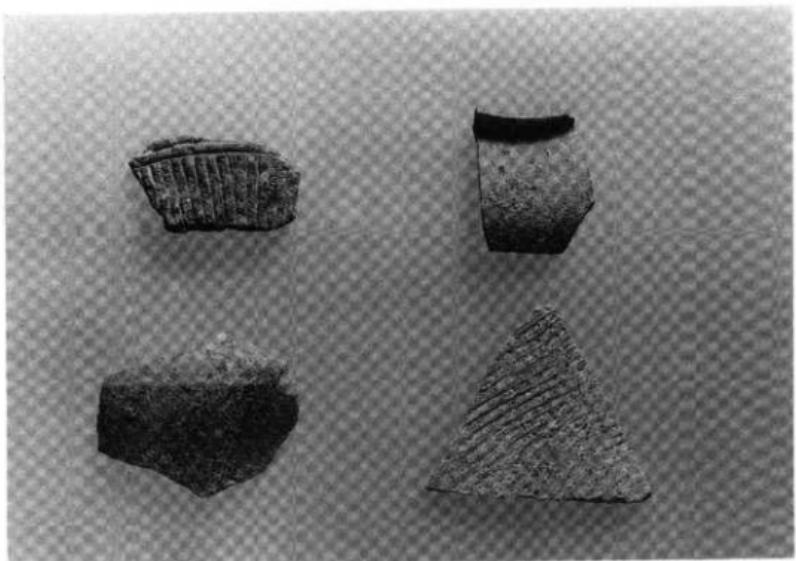


出土木杭 8

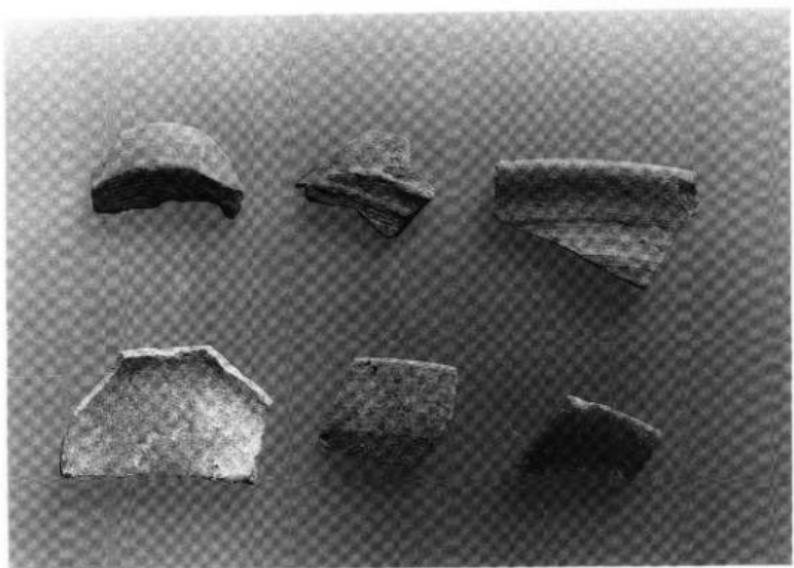


出土土器

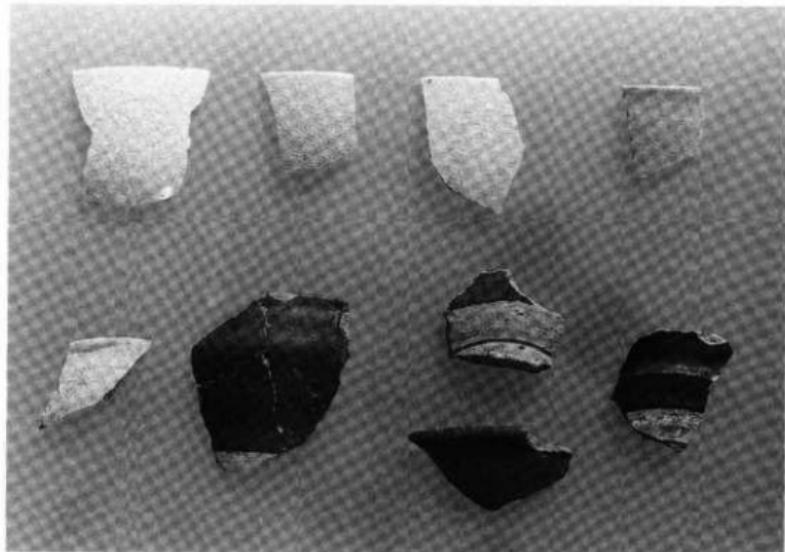




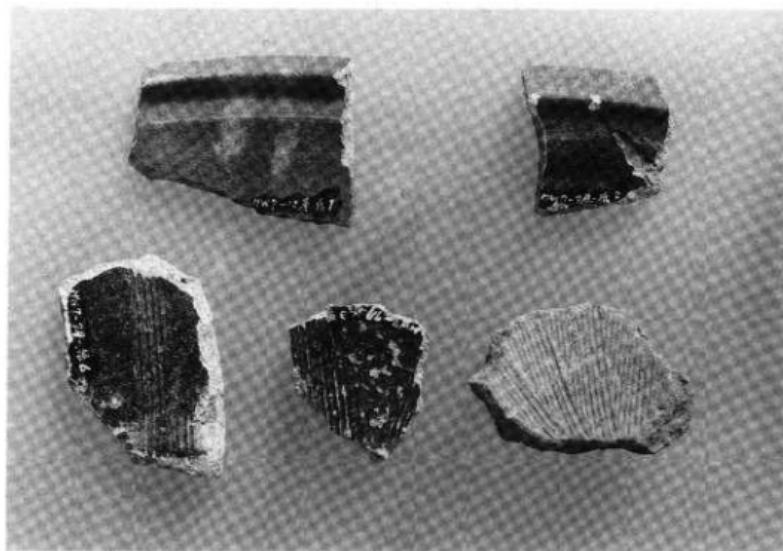
出土縹文土器・須恵器



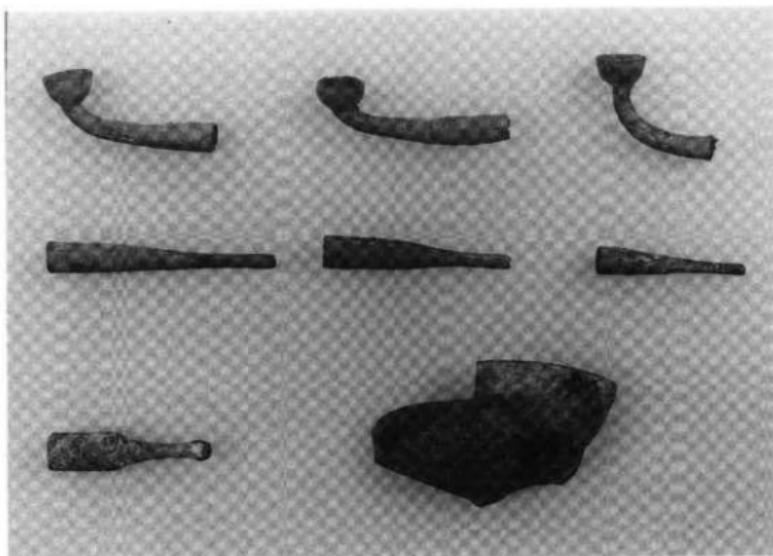
出土土師器系土器・陶器・磁器



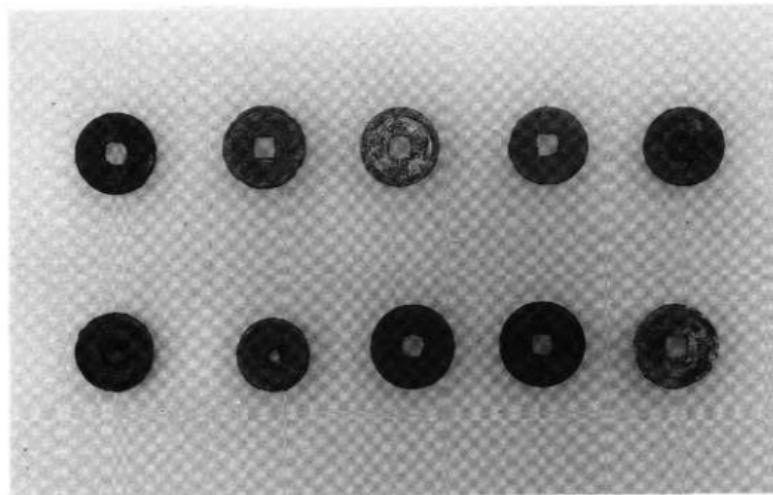
出土陶器 1



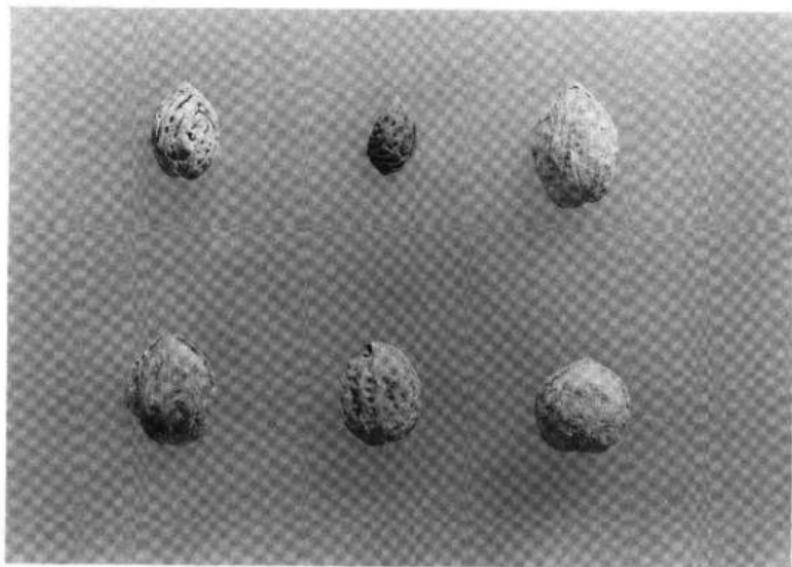
出土陶器 2



出土金属器



出土銭貨



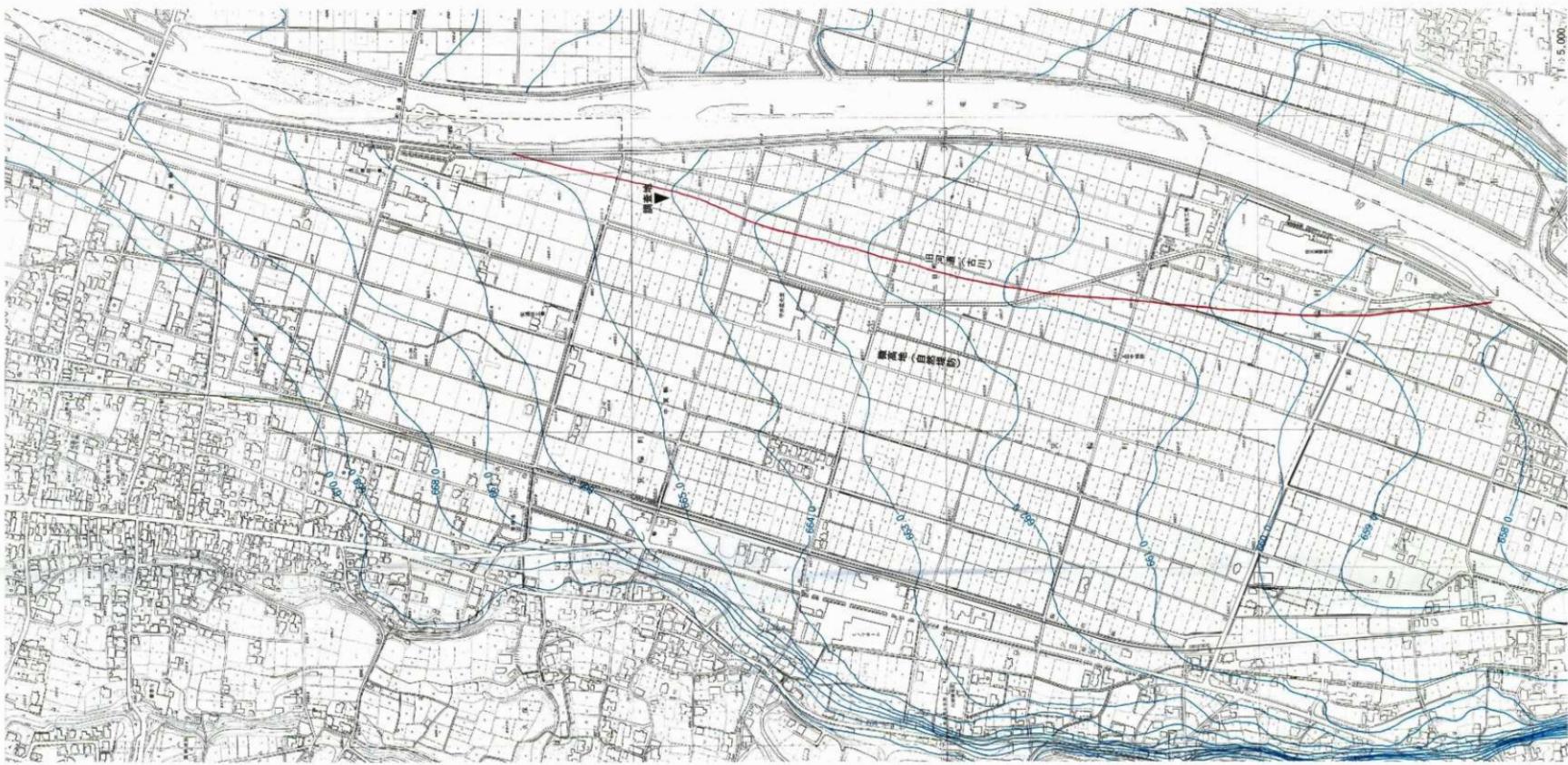
出土植物遺物



調查參加者

1:5,000

附图1. 深圳市地形分层图



## 箕輪遺跡

箕輪町公共下水道事業終末処理場建設に伴う  
箕輪遺跡の第7次緊急発掘調査報告書

平成3年3月20日 印刷

平成3年3月20日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会  
印刷所 伊那市(株)小松総合印刷所